

研究ノート

ハングル専門印刷から多言語印刷・翻訳業への展開

—— 僑文社・ケイビーエス株式会社の歩みから (2) ——

石川 亮 太*

要旨

本稿では大阪市生野区の在日コリアンの印刷業者、僑文社・ケイビーエスの歩みについて、1970年代までを扱った前稿に続き、1980年代から2000年代初頭までの時期を取り上げて検討した。この時期の僑文社・ケイビーエスは、電算写植システムの導入をはじめとする電算化、さらにマッキントッシュ (Mac) によるDTP組版への移行という、大きな技術的变化を経験した。電算写植システムの導入によって大量のテキストの処理が可能となった同社は、在日コリアンの顧客に加え、東京の大手出版社等から一般市場向けの書籍や雑誌の組版を受注するようになった。さらにMacの導入によって韓国語以外のアジア諸言語を含む多言語同時組版が可能となり、外国人訪日客や居住者をターゲットとした制作物も手掛けるようになった。これは技術的な可能性の広がりに加え、日韓交流の深まりや、日本社会の内部における多言語状況の出現といった変化に対応したものであった。こうした僑文社・ケイビーエスの歩みは、エスニック・マイノリティの企業が同胞のコミュニティを超えて市場を開拓し、成長していった事例といえる。

僑文社・ケイビーエスの成長を可能とした内部的条件として、在日コリアン二世である経営者高仁鳳が、同胞のコミュニティ内部に足場を置きつつ、日本敗戦直後にいったん朝鮮に戻り、幼少期をそこで過ごすなかで、韓国語の運用能力とともに日韓両国の社会を複眼的に見る姿勢を養ったことが挙げられる。在日二世の企業活動は、その生活における多様な経験を強く反映したものであり、このことに注目しつつ、さらに事例を記録する必要がある。

キーワード

エスニック・ビジネス、在日コリアン、印刷業、高仁鳳

* 立命館大学経営学部 教授

目 次

はじめに

1. ハングル専門業者としての確立 (1977 ~ 1989 年)
 - (1) 『朝鮮語大辞典』と電算写植システムの導入
 - (2) 電算写植システム導入後の変化
 - (3) 電算化のさらなる進展
 - (4) 1980 年代の制作物
2. 多言語印刷・翻訳業への展開 (1990 ~ 2003 年)
 - (1) DTP 化と多言語システムの構築
 - (2) 制作物の多言語化とマルチメディア化
 - (3) 制作体制の変化

おわりに

はじめに

第二次世界大戦後、在日コリアンの相当数は自営業者あるいは企業家として生計を立てることとなったが、そうした人びとについての歴史的な記録は十分に残されていない。このような認識から筆者は、1960年代から大阪市で印刷業を営んできた在日コリアンの企業・僑文社と、その後身であるケイビーエス株式会社について調査してきた。その成果として先に、1970年代までの僑文社を扱った「1960～70年代の大阪における在日コリアン印刷業：僑文社・ケイビーエス株式会社の歩みから(1)」(『立命館経営学』第61巻第2号、2022年7月、以下「前稿」)を発表した。本稿はその続篇であり、主に1980年代から2000年代初めまでの僑文社・ケイビーエスの活動を取り上げる。

前稿の内容を簡単に振り返っておく。僑文社は1959年頃、在日大韓基督教会の印刷物制作を主な目的として設立された。1968年に在日コリアン二世の高仁鳳(고인봉, コウ・インボン, 1941～2012年)がこれを買収し、妻の林芳子(임방자, イム・バンジャ, 1943年～)と共にその経営に当たった。当初、在日大韓基督教会の大阪西成教会敷地内にあった僑文社は、1969年に生野区鶴橋南之町(現在の桃谷二丁目)に移転、さらに1977年に勝山北二丁目に移り、1989年末の法人化・社名改称を経て、現在に至っている。

僑文社の最大の特徴は、韓国語と日本語双方の印刷に従事していたということである。高仁鳳は日本生まれの二世ながら、日本の敗戦直後に朝鮮に戻り、幼少期の10年程をそこで過ごした。そのため高仁鳳の第一言語は韓国語とあってよく、日本の公立学校を卒業し、日本企業に勤務しながら印刷物の清書・校正作業を経験していた林芳子と助けあうことで、上のような言語対応が可能となった。当初の大口顧客は在日大韓基督教会のほか韓国民団や民族学校など、在日コリアンの団体であり、他にチラシ・ポスターのような商業印刷物、結婚式の招待状など個人発注の印刷物も手掛けていたが、それらも含め、大阪とその近辺の在日コリアンの需要が

僑文社の初期における営業基盤となった。

僑文社の設備は当初、手差し印刷機による活版印刷であったが、印刷業全体の潮流（活版印刷から平版印刷への移行）にそって、高仁鳳は一連の機材を導入し、数年のうちに社内でオフセット印刷の一貫制作が可能な体制を整えた。特に手動写植機の導入で活版印刷よりも効率的にハングル組版ができるようになったことは、韓国語に対応できるオペレーターの定着とあいまって僑文社の制作物の幅を広げ、それまで中心だった一枚物の印刷物だけでなく、図書や雑誌などの受注も増加した。こうした中、韓国・朝鮮に関心を持つ日本人からの受注も生じていたとはいえ、1970年代までの顧客の中心はやはり在日コリアンにあった。

以上のような前稿の検討を踏まえて、本稿の第1節では、僑文社が電算写植システムの導入（1982年）に始まる電算化を通じて、ハングル印刷の専門業者として全国的な地位を確立していったことを明らかにする。続いて第2節では、1989年末の法人化と社名変更を経て、1991年のマッキントッシュ機の導入をきっかけに、韓国語に止まらず多言語混植のDTP（後述）やマルチメディア事業に展開していった過程を扱う。検討の下限は高仁鳳が社長を退任した2003年末とした。

本稿で利用する主な資料は、前稿に引き続きケイビーエスに所蔵される過去の印刷サンプル（刷り取り）や社内報『ナルゲ』（1992年創刊）、高仁鳳の業務ノート、同社に関する新聞・雑誌記事の切り抜きなどである。また林芳子をはじめ、社内外の関係者に電話や対面でのインタビュー、メールでの問い合わせを行って、文献資料の不足を補った。快くご協力いただいた方々に心より感謝申し上げたい。

用語の原則も前稿を踏襲している。韓国・朝鮮にルーツを持つ人びとを在日コリアンと呼び、在日韓国人という呼称をあわせて用いた。言語については主に韓国語と表記し、文字についてのハングルという呼称をあわせて用いた。印刷物の制作に関わる産業を全体として印刷業と呼ぶが、その内部では細かく分業が成立しており、僑文社・ケイビーエスもその全てに携わっていたわけではない。それぞれの工程に言及する際には、組版工程や印刷工程のように呼び、必要に応じて説明を加えることとする。

1. ハングル専門業者としての確立（1977～1989年）

僑文社は、1977年に社屋を現在地に移転する頃までに、手動写植機を中心として製版・印刷に至るオフセット印刷の工程を社内で完結できる設備を整えていた。こうした僑文社の設備構成において、大きな転機となったのは、1982年の電算写植システムの導入であった。これについて高仁鳳は、後日次のように回想している。

1981年に角川書店より「朝鮮語大辞典」の組版の話があったが、これは手動写植ではとてもかなわない。ハングルの電算化をせねばと、写研とモリサワに打診したところ、モリサワがOK。翌年1982年9月にハングル電算写植入力機の第1号機が我が社に入った。現在、その入力機は使命を終えて私の部屋に置かれている¹⁾。

僑文社はこの後、汎用パソコンのワードプロセッサを用いた入力態勢の拡充や、電子組版システムの導入など、組版工程における急速な電算化を通じて、ハングル印刷の専門業者として業界での評価を確立した。本節では、このような1980年代の変化について、制作物やその市場にも注目しながら検討する。

(1) 『朝鮮語大辞典』と電算写植システムの導入

『朝鮮語大辞典』の制作

電算写植システムの検討に先立ち、そのきっかけとなった『朝鮮語大辞典』について触れておきたい。1986年2月に角川書店から出版された『朝鮮語大辞典』(大阪外国語大学朝鮮語研究室編)は、上・下・補巻の3巻からなる朝鮮語-日本語辞典であり、規模においてこれを上回る同種の辞典は、現在に至るまで刊行されていない。

編集主幹である塚本勲によれば、この辞典の構想は、1963年に大阪外国語大学に朝鮮語学科が設置され、塚本が専任講師として着任した時に始まった。当時、日本には朝鮮語辞典と言えるものはほぼ皆無であった。塚本は本格的な朝鮮語辞典の刊行を目ざし、出版社未定のまま、学生と共に用例カードの作成を開始した。途中、予定していた出版社の倒産などの危機を乗り越えながら、角川書店との間で出版契約が結ばれたのは1975年であった²⁾。

辞典の組版は韓国の印刷業者が活字で行ったが、その障壁となったのは、「三十八度線の北と南とを同じ重さで見ると辞典」を志向する塚本が³⁾、韓国だけでなく朝鮮民主主義人民共和国(以下、共和国)の語彙も収録しようとしたことであった。反共を国是とする韓国では共和国の語彙を文字組みすることができなかつたため、これだけを抽出して日本で組版・印刷し、補巻として刊行することになった⁴⁾。僑文社が担当したのはこの補巻の組版であった(図1)⁵⁾。

塚本の記憶では、僑文社への依頼を提案したのは角川書店であったという⁶⁾。角川書店がなぜ僑文社を知るに至ったかは明らかではないが、前稿で述べたように僑文社は1970年代から韓国語のページ物を手動写植で組版

図1 『朝鮮語大辞典』補巻

로당원 固老党员. 党生活がながい党员.
 노동 固(固)労働. 働くこと. 人間社会の富を創造するための精神的及び肉体的活動. 人類のあらゆる幸福の源泉となる労働が, 搾取社会では賤しく重い苦役となっていたが, 社会主義社会では最も榮譽ある楽しい仕事となっている(引用). ④노동.
 【金日成】《노동에 대한 공산주의적태도를 키우는것은 공산주의교양에서 중요한 자리를 차지합니다. 우리는 근로자들을 로동을 즐기고 로동을 가장 영예로운것으로 여기며 노동에서 자각적 열성과 창발성을 내며 집단과 사회를 위한 공동노동에 성실히 참가하도록 교양하여야 하겠습니다.》労働に対する共産主義的態度を育てることは共産主義教育で重要な位置を占めています. 私たちは勤労者をして, 労働を喜び労働を最も誉れ高いものと考え, 労働に自覚的熱意と創造性を發揮し, 集団と社会のための共同労働に誠実に参加するよう教育しなければなりません. [조선로동당 제5차대회에서 한 중앙위원회사업총화보고(朝鮮労働党第5次大会において行った中央委員会事業総括報告), 63ページ].

注) 以下, 特記しない限りケイビーエス所蔵。

しており、その中には東京からの依頼もあった。僑文社がそうした技術を持つことは、東京の出版関係者にも知られていた可能性がある⁷⁾。

ただし僑文社が選ばれた理由は、技術上の条件に止まらなかったと思われる。塚本によれば、辞書の編纂作業の初期、共和国を支持する在日コリアンから「韓国の単語のあるこの辞典は、けしからん、潰せ」という声があがり、これに同調する人びとから強い圧力を受けたという⁸⁾。そもそも補巻を日本で制作するに至った理由は、共和国の語彙を韓国内で組版することはできないというものであったが、それとは逆の方向からの圧力も経験していた塚本にとって、僑文社が在日かつ韓国系の業者であることが考慮の対象とされた可能性がある⁹⁾。

ハンゲル電算写植システム

写植機のメーカーは1950年代に全自動写植機の開発を始め、1960年代後半には実用化していた。それは高速回転する円盤型の文字盤を使い、フラッシュで印画紙に露光させるもので、コンピュータ制御ではあったが、文字盤を透過する光を利用した光学式という点で、手動写植機と同じ原理のものであった。しかし1970年代後半になると、CRT方式と呼ばれる新しい方式の全自動写植機が開発された。これはCRT管（ブラウン管）に電子的にフォントを映し出し、印画紙に露光させるものであった。入力機や出力機など複数の機器で構成されていたそのシステムを、以下では総称して電算写植システムと呼ぶ。

電算写植システムは欧米でまず実用化されたが、日本を含む東アジアでの実用化は遅れた。その障壁となったのは、東アジア諸語の使用文字数がアルファベットとは比較にならないほど多いことであった。先んじたのは日本の㈱写研で、米国メーカーと提携して技術開発を進め、1979年に日本語版の第1号機を納入した¹⁰⁾。写植機の製造元として写研のライバル企業であった大阪の㈱モリスワは、1980年にイギリスのライノタイプ・ポール社と提携して合弁会社モリスワ・ライノタイプ㈱を設立し、これを販売会社として1980年末に日本語版の第1号機を納入した¹¹⁾。

高仁鳳は、こうした技術革新を背景に、『朝鮮語大辞典』補巻の組版を電算写植で行うことを思い立った。高仁鳳は、その理由を次のように業務ノートに書き留めている。

東京の角川書店より56年〔昭和56＝1981年〕9月ごろ「朝日辞典」の組版をしてほしいかとの問い合わせがあり、手動写植による組版は、今の僑文社たいせいでできないとはんだん。電植にすれば、それが非常にやりやすい。なぜなら、日本語と朝鮮語が別々に文選をすることができる。手動写植機でならば、この仕事は日本語も朝鮮語も両方ができるものでなければ出来なかったが、この場合、別々に日本語は日本語がわかるものが、朝鮮語は朝鮮語がわかるものが文選すればいいので、効率がよい¹²⁾。

手動写植は入力した順に印字され、後からそれを入れ替えたり加筆したりするには、現像後の印画紙を切り貼りするしかない。しかし電算写植であればデータを保存でき、後から加工することも可能である。ハングルの入力ができるオペレーターがごく限られており、その人物を長期にわたって『朝鮮語大辞典』の作業だけに専属させておくことはできないという人員配置上の現実的な条件が、高仁鳳に電算写植の導入を決意させた理由であった。

しかし当時、日本語の電算写植すら実用化されたばかりで、どのメーカーもハングルの電算写植は実現していなかった。高仁鳳がその開発を写研とモリサワに打診し、モリサワから同意を得たことは、先の引用文で見た通りである¹³⁾。高仁鳳によれば、開発作業の始まったのは1981年12月のことであった¹⁴⁾。これについて高仁鳳は、モリサワと「共同で研究開発を始めた」と表現しているが¹⁵⁾、高仁鳳がどのように関与したかは明らかでない。高仁鳳の業務ノートによれば、1982年始めには電算写植に必要なハングルの文字を選んだり、入力キーボードの配列を考えたりしていたようである¹⁶⁾。また後の回想では、日本語版の電算写植システムのプログラムを韓国語に置き換える作業をしたと述べている¹⁷⁾。ハングルの手動写植の経験を活かし、ソフト面での助言や協力をしたと見てよい。

1982年8月半ばには完成のめどがたったようで、僑文社は在日コリアンの民族紙『統一日報』に全5段のカラー広告「いま、印刷革命——ハングル写植のコンピュータ化に成功」を掲出した¹⁸⁾。9月に機材を導入した後、10月には早くも角川書店に『朝鮮語大辞典』の組版見本を送り、発音記号やロシア語など、未完成の部分はあるものの文選は開始できると伝えている¹⁹⁾。ただし僑文社では、電算写植システムのうち最も高額な出力機を購入することはできず、入力校正機だけを購入した。出力の際にはデータを8インチのフロッピーディスクに入れ、大阪市浪速区のモリサワ本社に持ちこみ、印画紙に出力した²⁰⁾。

この時に僑文社が導入した入力校正機 MCT10 (図2) は、もともと1981年にモリサワが日本語版の電算写植システムの機器として発売したもので、これをハングル入力が可能のように改造したものと考えられる。高仁鳳はこの機器について、「日本語の電算入力機をハングル化して、ソフトを入れ替えることで、日本語もハングルも入力できるようになった」としており²¹⁾、同じ文書に両語を混植することは可能であるものの、言語の切り替えの都度、フロッピーディスクに納められたシステムを入れ替える必要があったようである²²⁾。

図2 電算写植システムと高仁鳳 (1982年)



ところでモリサワの側では、なぜ高仁鳳の申し出を受け入れ、ハングルの電算写植システムの開発に取り組むことになったのだろうか。当時のモリサワには、個々のユーザーの事情に応

じてカスタムメイドの製品を提供することを厭わない社風があったという²³⁾。加えて、日本語の電算写植が実用化した以上、同じ全角文字であるハンゲルや中国語にも技術を拡張していくことは、メーカーとして当然視野に入っていたものと思われる。高仁鳳の申し出は、モリサワとしても時宜を得たものであったと見てよい²⁴⁾。

実際にモリサワは、僑文社に製品を納入したのと同じ1982年9月末、韓国の大手印刷会社である三和印刷(株)にハンゲル電算写植システムを納品し、10月初にこれを始動させている。これが公式にはモリサワ最初の海外向け電算写植システムとなった²⁵⁾。

その開発期間は「約五ヶ月」であったといい、1982年5月頃に着手されたと考えられる²⁶⁾。当時のモリサワ社員らの記憶によれば、その開発は韓国でモリサワ製の手動写植機の販売代理店となっていた三和洋行(株)から提案されたもので、同社の社員4～5名がモリサワ本社に来て仕様を策定し、開発にあたったという²⁷⁾。モリサワの元社員らは、僑文社がこれに関わったことを記憶していないが、高仁鳳は1983年の業界紙のインタビューに「[1982年]五月頃にはすでに韓国の三和印刷の人と一緒に勉強をし始めていたんです」と語っている²⁸⁾。韓国向けの電算写植システムの開発は、それより早く始まっていた僑文社向けのそれと社内体制上は区別されていたとしても、全く無関係であったとは考えにくい²⁹⁾。僑文社に納入されたシステムと韓国向けのシステムの異同は明らかでないが³⁰⁾、韓国向けシステムも校正機については僑文社向けと同じMCT10をベースにしたもので³¹⁾、納入された時期もほぼ重なることを考えれば、基本的には共通のシステムだったと考えられる。

さて、モリサワ・ライノタイプ社は、ハンゲル電算写植システムの完成とあわせ、1982年9月に韓国・台湾・香港・中国での独占販売権を親会社であるモリサワおよびライノタイプ・ポールから取得した。ハンゲルのみならず中国語の電算写植化も既に射程に入っていたことが分かる。そして翌1983年5月には最初の中国語仕様機を香港に出荷した³²⁾。写研もモリサワより僅かに遅れて1982年12月、韓国にハンゲル電算写植システムを納入し、1983年には香港に、85年には上海に中国語のシステムを納入した³³⁾。1982年から83年にかけて、日本の二大写植機メーカーがしのぎを削りながら東アジア言語の電算写植化を進めていったのであり、モリサワによる僑文社向けハンゲル電算写植システムの開発は、その先頭に立っていたと言えることができる。

(2) 電算写植システム導入後の変化

僑文社の社内体制

先述のように、僑文社は電算写植システムの導入後、直ちに『朝鮮語大辞典』の組版に着手した。ただしその段階で原稿が完成していたわけではなく、大阪外大の編纂グループから原稿が随時入稿され、その都度入力された³⁴⁾。その隙間を縫うようにして、他の制作物について

も電算写植システムが利用されるようになった。

ただし電算写植システムがただちに従来の手動写植に置き換わったわけではない。電算写植システムは、採字や出力などの処理速度において既存の手動写植を大きく凌駕し³⁵⁾、大量のテキストの組版を予め指定した形式に従って一括処理できることから(バッチ処理)、文字組みが中心のページ物(図書や雑誌など複数ページの印刷物)では威力を発揮したが、単純な縦組みか横組みにしか対応できず、書体も限られているという短所があった。そこでデザイン性が重視されるチラシやパンフレットなど一枚ものの商業印刷物(いわゆる端物^{はもの})では、書体が豊富で応用の利く手動写植が依然利用されていた(図3)³⁶⁾。

図3 手動写植機の操作(1980年代)



高仁鳳のノートによれば、電算写植システムの導入から1年半を経た1984年3月時点の業務態勢は次のようであった——「入力」2名、「版下デザイン」1名、「写植」2名、「電話・事務」1名、「営業」2名、「キカイ」2名、「活版」1名³⁷⁾。担当内容が判然としないものもあるが、単純に合算すると11名となる。このうち「入力」が電算写植システム、「写植」が手動写植機を指すと見られる。電算写植システムと手動写植機、さらにハガキなどの印刷になお利用されていた活版機³⁸⁾と、3種類の機材が併用されていたことになる。

このうち電算写植システムについては、1982年に導入したMCT10に加え、1986年までにモリサワ製の入力校正機2台が追加導入された³⁹⁾。ハングルの電算写植システムは、発売当時はもちろん、その後もかなり長い間にわたって日本国内では他に導入例がなかったようであり⁴⁰⁾、僑文社の技術的な優位は大きかった。

一方で高額な電算写植システムの導入は僑文社の財務上、大きな負担となった。1983年3月、高仁鳳が融資元の信用組合大阪興銀に提出するため書いたと見られる文書では、「資金ぐり悪化の原因」として、ある月刊誌の仕事が中止となって定期的な売り上げが減少したことに加え、僑文社の規模では電算写植システムは過剰設備であると述べている⁴¹⁾。

こうした状況に対して高仁鳳が採りうる当面の方策は、受注を拡大して設備の回転率を引き上げるとともに、売上げを増加させることしかなかった。高仁鳳は同じ文書で、「解決と今後の見通し」として次のように述べている。

営業面を強化して、別の方から、売上げをのぼすようにする。そのために、今まで以上のセールスを展開する。たとえば、大阪興銀総務部へ毎日のように足をはこぶようにすると、伝票のような仕事とれるようになっております。済州青年会に加入しておりますので、その会員の会社にも注文とりにまわりはじめております。僑文社案内パンフをつくって、轄

国と取引する日本企業にも案内しようと思います⁴²⁾。

ここから高仁鳳が、在日コリアンのコミュニティ内部の需要を依然基盤としつつ、日本の一般市民や企業への顧客の拡大も視野に入れていたことが窺われる。

三修社『基礎ハンゲル』（1985～87年）

電算写植システム導入後の僑文社による代表的な制作物であり、在日コリアンのコミュニティの外に市場を開拓した例として、『基礎ハンゲル』（月刊誌、1985年5月～87年4月）が挙げられる（図4）。

発行元の三修社（東京都渋谷区）は1938年創業で、語学関係の出版に力を入れてきた。雑誌としては既に『基礎ドイツ語』『基礎フランス語』を刊行しており、『基礎ハンゲル』はその姉妹誌と位置付けられた⁴³⁾。韓国語の学習誌としては「日本で初めて」というこの雑誌が⁴⁴⁾、どのような経緯で生まれたかは定かでない。しかしNHKが長い準備期間を経て1984年4月に「안녕하십니까? ハンゲル講座」の放送に踏み切ったように⁴⁵⁾、韓国語の学習が在日コリアンの範囲を超えて広がりつつある時期であった。

僑文社はこの雑誌の組版作業を受注した⁴⁶⁾。高仁鳳の回想によれば、まず三修社の担当者が僑文社を視察に訪れたものの、その後、音沙汰がなかった。不審に思った高仁鳳は1984年11月、三修社に出向き、僑文社のような「小さな町工場」では月刊誌はできないと渋る役員を説き伏せ、「僑文社で出来ないのなら、日本でどこを探してもできませんよ」と言い切って受注にこぎつけた、という⁴⁷⁾。三修社側が僑文社を知った経緯は明らかでないが、当時の担当者の記憶によれば、最初に高仁鳳に会ったのは、1984年5月に東京で開催された「日本の本」展ではなかったかという⁴⁸⁾。角川書店から『朝鮮語大辞典』組版を受注した後も、高仁鳳が自ら東京で営業活動して顧客を開拓していたことが窺われる。

翌1985年から実際に始まった組版作業について、三修社の担当者は次のように回想する。

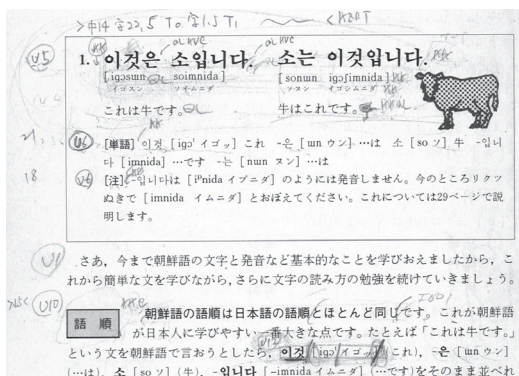
明朝にゴシック入り交じったハンゲル、万国音標文字にカタカナルビも付け、表組あり、学習効果を高めるために文字の大きさを何種類も使うという最高難度の組版ができる印刷所は東京にはありませんでした。たどりついたのが当時「僑文社」を名のっていたKBSです。月刊誌の性格上、絶対に配本日をずらすことができないため、ずいぶんご無理をお願いいたしました。私も校了のために「僑文社」の隣りにあった旅館に泊まり込んだことを思い出します⁴⁹⁾。

図4 『基礎ハンゲル』創刊号(1985年)



厳しい時間的制約のなかで、高度な組版作業が行われたことが分かる。これについて、高仁鳳が 1990 年頃に整理したと思われる僑文社の沿革年表では、「ハングル文字から、発音記号、カタカナ読み、日本語訳、罫、が入り混じった、難しい組版であったが、電算で完全ページアップを成し遂げた」としている⁵⁰⁾。ページアップとは、組版を電算写植システムの上で完成し、完全な版下の形で出力したことを意味す

図 5 『基礎ハングル』創刊号より



注) 電算写植のコマンドが書き込まれている。

る。入力機の画面上でページレイアウトを完成させ、その通りに出力できる DTP (デスクトップ・パブリッシング) が普及するのは 1990 年代のことであり (次節で後述)、それ以前は、レイアウトの構成要素ごとばらばらに打ちだした印画紙を切り貼りして版下を作成するのが一般的であった⁵¹⁾。そうした切り貼りの必要がないページアップの組版を、技術的な制約がなお多い当時の電算写植システムの上で成し遂げるには、相当の熟練を要したと考えられる (図 5)。

僑文社ではそれ以前から韓国語の語学書や、韓国人名の読み方字典 (『本名を正しくよぶための人名仮名表記字典』1975 年) の制作を通じて、多様な韓日混植のノウハウを蓄積してきた⁵²⁾。手動写植機のオペレーターとして、それらの制作に携わってきた鄭炳采 (1973 ~ 96 年在職) が、『基礎ハングル』の組版作業を主に担当した。電算写植システムの導入という技術革新の一方で、そうした熟練の蓄積が高度な組版を可能にした点も看過できない。

東京支社の開設 (1985 年)

1984 年には『基礎ハングル』の組版を受注したほか、成甲書房 (東京都千代田区) の『韓譯萬葉集 一』を印刷するなど⁵³⁾、東京の顧客との取引が増えていたようで、高仁鳳は頻繁に東京に出張している⁵⁴⁾。この年 2 月には東京での拠点として渋谷区に事務室を借りているが⁵⁵⁾、常駐の人員はいなかったようであり、そのことによる不便を次のように業務ノートに書き留めている。「東京もなかなかきびしい。どのように原稿のうけわたしをするのか、校正はどうするのか」(1984 年 3 月 20 日)、「やっぱり常住するぐらいでもっと当るべきだろう。거리 [距離] 的にとおいといわれる」(同 5 月 7 日)、「東京へ行くのが、ままたらなため、あまり、東京の効果がうすい」(同 5 月 21 日)⁵⁶⁾。5 月には大阪の社屋にファックスを導入し、原稿の受け渡しに利用するようになったが⁵⁷⁾、それだけでは不便を解消できなかったようで、翌 1985 年 2 月、東京都文京区に支社を設けた⁵⁸⁾。

東京支社開設の経緯について、高仁鳳は次のように回想している。

1985年東京支社を開設した。モリサワがある文京区に事務所を借りた。雑誌「オリエント」を発行していた金憲淑さんが一時東京支社を受け持っていたが、やがて義弟の林季成に支社を任せた。この時は、ハンゲル電算写植を持っているのは我が社だけで、日本の韓国語関係印刷物の大半は受けるようになったと思う⁵⁹⁾。

林芳子によれば、林季成は僑文社の業務だけに専従していたわけではなく、他の仕事との掛け持ちではあったが、東京での顧客の開拓に貢献したという⁶⁰⁾。高仁鳳は、1980年代末には僑文社の受注の「約80パーセントが東京からの仕事」になったとも述べている⁶¹⁾。

このような東京での顧客の拡大は、制作物の変化とも連動していたと考えられる。1988年の新聞記事によると、「同社〔僑文社〕の受注は、頁物が圧倒的で、学参物や旅行関係、雑誌が主であるが、民間のクライアントからの受注は韓国へのPRが中心となるため、殆どが日本文の翻訳から扱うことになる。〔中略〕得意先としては、旅行社、在日韓国諸団体、出版社等が上位を占めるが、同社の印刷物は翻訳という付加価値が入ったり、和韓混植ものの一般印刷会社で対応できないものが多いため、収益面からみても悪くない印刷物に恵まれている」という⁶²⁾。大量の文字組版に強いという電算写植システムの長所を軸に、翻訳というサービスも付加しながら、ページ物を中心に受注を拡大していった様子が窺われる。同時にその顧客は、在日コリアンのコミュニティを超えて、東京に集中する民間企業に広がった。その背景には、韓日の経済関係の緊密化や人流の拡大、ソウル五輪（1988年）などを契機とした日本社会における韓国への関心の高まりがあったことが推測される。

このように東京支社の開設は、電算写植システムの導入に伴う顧客の拡大と制作物の変化を反映したものであった。東京支社は1996年頃まで機能していたようである⁶³⁾。

多言語印刷の萌芽

僑文社では『基礎ハンゲル』の受注と同じ1984年、末広バルブ製作所という企業のパンフレットを作成している（図6）。これについて高仁鳳が作成した僑文社の沿革年表は、「日本語・中国語・韓国語・英語の4か国語を同時電算出力する。これも世界初」としている⁶⁴⁾。この制作物は、僑文社が韓国語以外の多言語の印刷に取り組んだ最初期の例と思

図6 末広バルブ製作所会社案内（1984年）



注)「今回弊社は五つの言葉を掲載した会社案内を発行し、より一層国際間の人と人との交わりを深めていきたいと思っております」（「御挨拶」より）。

われる。

末広バルブ製作所 (現・株式会社エス・ブイ・エフ) は大阪市西成区に本社を置く金属部品メーカーで、1916 年創業の砲金バルブコック製作所に起源を持ち、1970 年代半ばから石油パイプ用のジョイント (継ぎ手) の製造に重点を置くようになった。製品の主な仕向け先は中東の産油国であったが、商社を通じて中国や韓国、東南アジアにも販売を拡大していた⁶⁵⁾。

僑文社が制作した末広バルブ製作所の会社案内 (表題『COMPANY PROFILE』) は、会社の沿革や事業内容について、英語・アラビア語・中国語 (簡体字)・韓国語・日本語の 5 言語対訳で作成されたカラー刷りパンフレットである。中東の産油国をはじめとする輸出先の顧客への配布を念頭に置いたものと考えられる。これについて、アラビア語は東京の写植業者に依頼し、印画紙を版下に切り貼りしたようだが⁶⁶⁾、他の 4 言語については電算システムを通じた同時出力に成功したというのが、上に引いた沿革の趣旨と思われる。

先述のように 1982 年 9 月に僑文社がハングル電算写植システムを導入した後、モリサワ・写研は相次いでハングル・中国語の電算写植システムを発売していた。末広バルブ製作所の会社案内は、既に開発されていた英語・日本語に加え、新たに開発されたハングル・中国語の電算写植システムを併用したのと考えられる。

ただし僑文社が導入した電算写植システムは日本語とハングルにしか対応しておらず、当時は中国語のできる人材も社内になかった。これをどのように解決したかは現在明らかでないが、おそらく中国語の電算写植システムを持つ業者に依頼して組版データだけを作成してもらい、これを僑文社で作成した日本語・ハングル・英語のデータと組み合わせて、モリサワ本社の出力機で同時出力したのであろう⁶⁷⁾。大阪にはいくつかの中国語の写植業者があり、僑文社もそれらと取引関係があった⁶⁸⁾。

僑文社 (ケイビーエス) が本格的な多言語印刷に乗り出すのは、後述のように 1990 年代のことである。しかし 1980 年代前半、高仁鳳が既に電算写植システムの拡張性に注目し、限定的ながら多言語印刷を試みていたことは興味深い。またそうしたサービスの需要が、日本企業の海外活動の多角化という状況を背景としていたことも、先に見た顧客層の変化と関連するものとして注目される。

(3) 電算化のさらなる進展

ワープロ入力の実現

電算写植システムの導入は、ページ物を中心とする受注の増加に貢献したと考えられる。しかし電算写植システムへの業務の集中は新たな問題を生んだ。『基礎ハングル』を受注した 1984 年の高仁鳳のノートには、次のような文言が現れる⁶⁹⁾。「韓国文といえば僑文社になりたい。〔中略〕 そのためには入力のスムーズ——より効率の上がる入力方法を考えなくては」

（5月21日）、「このごろ仕事はいそがしい。〔中略〕とにかく僑文社の進める道は、①いかに入力を早くするか。②いかにその処理（プログラム）を早くするか。にかかっているように思う」（6月4日）。いずれも、入力作業の効率に問題があったことを示唆している。電算写植システムのメリットの一つは処理の高速化にあったが、入力作業がそのボトルネックとなっていたのである。

この問題の突破口となったのは、汎用パソコン上のワードプロセッサ（以下ワープロ）による入力であった。高仁鳳は個人的には早くからコンピュータに関心を持っており、TSR-80（アメリカ製、1977年発売）やPC8001（NEC、1979年発売）を購入していた⁷⁰。業務への活用にも関心があり、1983年の新聞インタビューでは「電算写植機とコンピュータの結合により印刷物の情報管理（例えば、名簿などを出身地別に分離して印刷する）までこなしたい」と語っている⁷¹。ただしこの段階では実際に利用するには至っていなかった。

高仁鳳が業務にパソコンを導入した直接のきっかけは、1984年6月、東京の出張先でワープロによる入力作業を実見したことであった⁷²。日本語のワープロは、まず専用機が1978年に発売され⁷³、1981年にはパソコン用の日本語ワープロソフトも発売された⁷⁴。1983年から84年にかけては、NECのPC9801シリーズ（1982年発売）にあわせて、ワープロソフト「松」（管理工学研究所、1983年）をはじめ、高機能のビジネスソフトが続々と発売された⁷⁵。これと連動して、印刷業界においても、ワープロ入力されたデータを電算写植システムに取り込むためのコンバート（変換）ソフトが各種発売された⁷⁶。こうした状況を見て、高仁鳳もパソコンが業務に十分利用できるかと判断したのだろう。

高仁鳳は東京から帰ると早速PC9801-F2のリース契約を結び、同時に「松」を購入した⁷⁷。「松」を手にした高仁鳳は、「なかなか良いソフトだ。ローマ字入力であればボクだってできる。なんとかこれが仕事につかえるようになってほしい」という感想を漏らしている⁷⁸。電算写植システムでの入力は、多段シフト方式という特殊な方式をとっており⁷⁹、熟練したオペレーターでなければ使いこなすことができなかった。そうした熟練を要さないワープロ入力への移行により、より柔軟な人員配置が可能となることが期待されたのである。

ワープロソフトの入力データを電算写植機で利用できるようになったことで、入稿・入力の形態も変化した。三修社『基礎ハンゲル』の組版について、高仁鳳は、1986年の印刷業界誌のインタビューに以下のように答えている。

去年五月に東京の三修社から発行された月刊誌『基礎ハンゲル』ではハンゲル文字から発音記号、カタカナ読み、日本語訳、罫、ノンブル、見出しまで全てを一度に電植出力しているが、こうなるまでにはかなり苦勞した。三修社さんとは『基礎ハンゲル』の組版を直接受注しているわけだが、ハンゲル文字まじりの和文が多い。これは編集部からワープロ

(NEC・PC9801, ワープロソフト『松』) で入力したフロッピーが当社に送られてきてそれを電算入力・校正機のリサワコードに変換してやり、ワープロにないハングル文字やルビ、外字などを付加してコーディングする。また、ハングル文字が目立つ原稿は当社の電算入力機で和文も並行して入力されるが、作業効率を高めるためにまず和文の原稿だけを専用機で入力し、次に韓国語に明るいオペレーターに簡単なコーディングも含めたハングル文字の入力、そして最後に熟練コーディネーターの手で仕上げるシステムを採っており、品質面でも万全を期している⁸⁰⁾。

ここから、和文原稿についてはフロッピーでのデータ入稿が実現していたことが分かる。具体的には、「松」のデータをまず PC9801 のコンバートソフトによって電算写植システムで利用可能なデータに変換し、これを電算写植システムの入力校正機で加工、ハングルのデータを付加して組版データを完成したと考えられる。また電算写植システムの上で、日本文入力とハングルの入力、最終的な組版の作成をそれぞれ別のオペレーターに分担させたことは、稀少な人材をより効率的に活用するための工夫とすることができ、電算写植システムの導入当時から構想されていた業務体制(注 12 参照)が踏襲されていたことが分かる。

韓国語ワープロの利用

上に引用した 1986 年の資料(注 80)では、ハングルについては電算写植システムで入力するとしているが、同じ年の 8 月に株式会社高電社の韓国語ワープロソフト「KOA - 文書 [한글]」が発売されたことで、入力態勢はさらに変化した。

大阪の在日コリアン一世代高基秀(1934～2006年)が 1979 年に創業した高電社は、パソコン用のソフトウェアの開発に従事し、1981 年には日本初の日本語ワープロソフト「WORD3000」とともに、韓国語の「ハングル 4300」を発売していた⁸¹⁾。KOA - 文書 [한글] は PC9800 シリーズに対応し、日本語とハングルを同じ文書上で編集できた。

高仁鳳は、「入力そのものをパソコンでできないかと考え始めていた時」、このソフトの開発について知り、「早速飛びついて、モニターになるからと発売前のものを譲り受け日夜考えた末、電算写植に結びつけることに成功した」という⁸²⁾。高基秀は高仁鳳の両親と同じ済州島の出身で、高仁鳳とは建国高等学校の同窓生(4期)でもあった⁸³⁾。高仁鳳との個人的な接点の有無は明らかでないが、アプローチしやすい立場にいたと考えられる。

ただし KOA - 文書 [한글] を僑文社の業務に用いるためには、そのデータを電算写植システムで利用可能な形に変換する必要があった。高仁鳳は次のように回想している。

ハングルワープロとして KOA ハングルがあった。私はこれに目をつけ、これを電算の入力

機に使えないかと考えた。〔中略〕このワープロデータを電算に利用するには、変換ソフトを考えればいい。電算写植の文字コードとワープロの文字コードを対応させて変換すれば、ワープロで電算写植の入力機に使えることがわかった。それで文字対応表を作り、文字変換テーブルを作った。それで、変換するソフトが出来た。もちろん、KOAハンゲルのワープロソフトを作った高電社の協力も得ての完成だ。それで、電算写植の入力はパソコンですることが出来た。電算入力編集機はただ編集することだけに使うようにしたので効率が上がった⁸⁴⁾。

ここから KOA-文書〔한글〕のワープロデータを電算写植向けに変換するプログラムを、高仁鳳自身が作成したことが分かる⁸⁵⁾。これによって日本語だけでなくハンゲルについても、パソコンでのワープロ入力が可能となった。

1987年の現有設備は「モリサワの編集機が三台と、文字入力のためのパソコン PC9801 が四台」であった⁸⁶⁾。パソコン導入により入力と編集を別端末で行うことができ、また電算写植システムに触れたことがない者でも入力作業に従事できるようになったことで、作業効率は大きく向上したと考えられる。高仁鳳の回想によれば、1988～89年頃の状況として、パソコンによる文字入力作業では、「外部入力者」や「韓国から来日した商社マンの奥さんのアルバイト」が多く従事していたという⁸⁷⁾。林芳子によれば、ハンゲル入力のオペレーターには、在日コリアンとの結婚により渡日した女性や、留学生の配偶者などもいた。増えつつあったニューカマーの韓国女性が入力作業の担い手となっていたのである（図7・8）。

電算化の拡張——情報管理と通信

高仁鳳がパソコンの導入以前から、コンピュータを用いた情報管理に関心を持っていたことは先述した（注71）⁸⁸⁾。在日コリアン団体などの名簿は、1970年代から僑文社の主要な制作

図7 僑文社のスタッフ（1988年1月）



注) 後列右端から鄭炳采・高仁鳳、後列左端林季成、前列右から3人目林芳子

図8 1980年代末の社内風景



注) 左が電算写植校正機、右が入力用パソコン

物の一つであり、そうしたデータの管理においても電算処理が威力を発揮することに、高仁鳳は早くから気付いていたと思われる。1984年にPC9801を導入すると、ワープロソフト「松」と並んでマイクロソフト社の表計算ソフト「Multiplan」をただちに導入し、見積もり作成などに利用していたことが確認できる⁸⁹⁾。

こうした機能を活用した制作物として、1989年刊行の『在日韓国人実業名鑑(関西版)』を挙げる(図9)⁹⁰⁾。僑文社は1988年6月、韓国系の民族紙『共同新聞』を発行していた共同新聞

図9 『在日韓国人実業名鑑(関西版)』(1989年)

高 仁 鳳 고 인 봉		僑 文 社	
【日本名】 こう いんほん		【所在地】 大阪市生野区勝山北2-16-17	
【役 職】 代表		TEL. 06-716-5665 FAX. 06-716-5659 ☎544	
【性 別】 男	【生年月日】 1941年5月1日	【業 種】 C	
【本 籍】 ソ ウ ル		【設 立】 1968年1月1日	【資本金】 100万円
【プロフィール】 建国高・大阪経済大卒。在学中より新聞編集などに興味をもち合成樹脂新聞社などを経て印刷業界に入る。時代の要求に応じハンゲルをいかに印刷文字化するかを追求しつづける。3男。趣味はパソコン。		【年間売上】 9,000万円	【従業員数】 10名
【取引銀行】 大阪興銀, 住友		【事業内容】 総合印刷・写植・電算写植・ワープロ・翻訳・編集・企画(日・韓・中・英)	
		【特色・近況】 創業21周年を迎える。一貫してハンゲル印刷を手掛けてきたが最近は中国語、英語にも拉がり、また写植・翻訳・編集部門も強化している。	

88

社(大阪市北区)からその制作を依頼された。これは印刷だけではなく、取材・編集から印刷までの一括受注であり、僑文社ではそのため新たに社員を雇用し、専属のチームを立ち上げるなど、強く力を入れた取り組みであった。僑文社のチームは共同新聞社の社屋に編纂室を与えられ、そこで作業したという⁹¹⁾。

作業の進め方は次のようであった。まず韓国人商工会や韓国青年会議所等の名簿を入手して、氏名や会社名、住所等のデータをパソコンに入力する。これに基づいてアンケート用紙を打ち出して本人に郵送するほか、電話やファックス、直接訪問も行ってデータの補足を図る。データ整理には管理工学研究所のデータベースソフト「桐」(1986年発売)を利用し、組版フォーマットを決め、電算写植のデータに変換した。また名前のハンゲルの入力には先述のKOA-文書[한글]を利用し、ハンゲル順に配列した⁹²⁾。

この『名鑑』の制作過程ではパソコン通信も利用された。日本では1985年の通信自由化以後、急速にパソコン通信が普及しており、高仁鳳も1988年からこれに加入したようである⁹³⁾。『名鑑』の制作にあたっては、「共同新聞社にもPC98を導入してもらい、取材したデータはすぐ、98に入力。そのデータは僑文社へコンピュータ通信を利用し、送信される」という手順をとったといい⁹⁴⁾、加入したばかりのパソコン通信を活用していたことが分かる。1988年の業界誌の記事では、僑文社が高電社製の通信ソフト「KOA-JUST」を利用し、ハンゲル文書ファイルをはじめ電子データの受け渡しを行っていること、将来的には韓国でハンゲルの入力オペレーターを確保し、データの初期入力を行わせて通信で受け取る計画も立てていると報じている⁹⁵⁾。『名鑑』でパソコン通信が利用されたことには、そうした構想の準備という意味も込められていたと思われる。

電子組版システムの導入

僑文社が1986年までにモリサワの電算写植システムの入力校正機を3台導入していたことは先述したが、1987年8月、新たにリョービ株式会社のRECS200（1985年発売、以下RECSシステム）を導入した⁹⁶。RECSシステムは、組版を電子的に行う点は電算写植システムと共通しているものの、出力は光学式で、既存の手動写植機と同様の文字盤を自動駆動させて印画紙に印字するものであった。このような発想に基づく製品は、電算写植システムと区別して電子組版システムと呼ばれ、出力装置も含めて相対的に廉価に導入できるため、電算写植システムの簡易版という位置づけで、中小企業を中心に普及した⁹⁷。

RECSシステムの僑文社にとっての意義は二つあった。一つは、上述のように相対的に廉価だったため、出力装置も含めて導入でき、自社内出力が可能となったことである。もう一つは文字盤の規格が写研ほか他メーカーの手動写植機のそれと共通だったことである⁹⁸。電算写植システムで利用できる書体はこの時期なお限定的で、書体の豊かさという点では、手動写植機向けの文字盤が圧倒的に有利だった。RECSシステムでは、手持ちの手動写植機の文字盤を活用し、豊富な書体で制作できることが大きなメリットとなった⁹⁹。

高仁鳳はRECSシステムを大阪写植組合の同業者を通じて知り、リョービの組版講習会に出席して導入を決めた。その際に問題となったのは、パソコンのワープロソフトで入力したデータを変換して利用できるかという点であった。特にハンゲル原稿について、書体指定まであらかじめワープロ上で行うことはリョービでは想定していなかったが、ハンゲル原稿の多い僑文社ではぜひ必要な機能であり、高仁鳳自身が書体指定のコマンドを開発した。またRECSシステムの組版データを、校正のため再度パソコン上のワープロに戻す逆変換のプログラムも開発した¹⁰⁰。このようなカスタム化の発想は、それまでの電算写植システムの利用を通じて蓄積されたものと言える。

RECSシステム導入後の業務態勢については、次の1989年の記事から確認できる。

同社〔僑文社〕では、現在このシステム〔RECSシステム〕に写研の文字盤を搭載。これにより、豊富な書体でハンゲル電植が可能となり、これまで仕事の中心であった頁物に加えて、韓国向けの製品カタログなど、端物的な仕事の注文も受けられるようになった。また同社では翻訳もできるので、ユーザーは日本語で作成された見本を持参するだけでよいということもあり、業績は好調。最近では大手製薬会社の韓国向けのスライド五十点の注文も受けている。〔中略〕現在同社では、モリサワのライノシステムは大量の頁物処理用に、RECSは端物的な仕事や小ロットの仕事に使い分けている。RECSでは七書体が使用できるので「韓国国内でもこれほど書体を持っているところはないだろう」（高社長）と、大きな自信を示している¹⁰¹。

ここから、モリサワの電算写植システム（引用中の「ライノシステム」）と RECS システムを、制作物によって使い分けていたことが分かる。ページ物に特化して用いられた電算写植システムに対し、豊富な書体が利用できる RECS システムは、デザイン性が求められるカタログやパンフレットなどの商業印刷物でその威力を発揮したと考えられる。RECS システムで用いるハングルの文字盤については、韓国から購入した¹⁰²⁾。1989 年の段階で僑文社はハングルだけで 7 書体を揃え、高仁鳳が「韓国内でもこれほど書体を持っているところはないだろう」と自賛していたことは、上に引いた資料に見える通りである¹⁰³⁾。

僑文社では、電算写植システムの導入後、その特性が発揮されるページ物の受注が増えていることを先に見た。端物と呼ばれる商業印刷物については手動写植機で対応していたと考えられるが、生産性の不均衡は大きかったと考えられる。RECS システムの導入は、そうした不均衡を解消し、制作物のウイングを広げるのに貢献したと推測される。

(4) 1980 年代の制作物

ここまで技術面の変化と関連付けながら、僑文社の制作物についても述べてきたが、1980 年代の制作物の傾向について改めて見ておきたい。ただし、制作物全体の構成はまだ整理できていないので、ケイビーエスの社内報『ナルゲ』に 50 周年記念特集の一環として掲載された「KBS 作品集：1968～2017 年」（第 51 号、2018 年）を用いて検討する。「KBS 作品集」には僑文社・ケイビーエスの制作物 154 点の書影が掲載されているが、前稿ではこのうち 1960～70 年代の制作物 42 点を取り上げて検討した（前稿表 2）。ここでは 1980 年代の制作物 28 点を取り上げて検討する（表 1）。

表 1 を前稿表 2 と比較した時、まず気が付くのは発注者（発行者）¹⁰⁴⁾ の傾向の変化である。前稿表 2 によれば、1960～70 年代の制作物 42 点のうち、最も多いのはキリスト教会（在日大韓基督教会）に関係するものであった（14 点）。これは僑文社が在日大韓基督教会の印刷部門から出発したことを反映している。対して 1980 年代についての表 1 では、在日大韓基督教会から受注した作品は 1 点に過ぎない。実際には在日大韓基督教会の印刷物は途切れることなく制作していたというが¹⁰⁵⁾、その内容に大きな変化がない等の理由で、代表的な制作物としては挙げられなかったのであろう。韓国民団に関する制作物も同様と考えられる（前稿表 2 では 6 点、表 1 では 1 点）。

一方で表 1 では、各種民族団体に関する制作物が 10 点で最も多く、企業・事業所に関するものが 8 点でこれに次ぐ。また前稿表 2 では見られなかった、公共団体に関わる制作物も現れる。所在地に注目すると、各種民族団体の多くは関西地方とくに大阪府のものだが、企業・事業所と公共団体の中には、東京に所在するものが少なくない（角川書店、三修社、成甲書房、NHK 国際局、東京都立中央図書館、日本国有鉄道・海外鉄道技術協力協会）。これは電算写植システ

表1 僑文社の主要制作物(1980～89年)

(1) キリスト教会

〔週報用紙〕	1980	在日大韓基督教下関教会（下関市）	変型 / リーフレット / 韓文
--------	------	------------------	------------------

(2) 民族学校

愛民：名古屋韓国学校開校第20周年記念誌	1982	学校法人愛知韓国学園（名古屋市）	B5 / 306頁 / 韓日文
----------------------	------	------------------	-----------------

(3) 韓国民団

韓国民団生野地区大運動会	1987	在日本大韓民国居留民団生野地区協議会（大阪市）	B5 / 12頁 / 韓日文
--------------	------	-------------------------	----------------

(4) 各種民族団体

韓国語を正しく学ぼう：基礎編	1980	関西日韓協会（大阪市）	B5 / 68頁 / 韓日文，駐大阪韓国総領事館（後援）
セクトン：日本語で書かれている朝鮮児童図書目録	1983	せくとん（セクトン）会（京都市）	A5 / 72頁 / 韓日文
解放の日まで：写真資料集	1986	青丘文化ホール（大阪市）	A4 / 29頁 / 日文
韓国舞踊10周年記念公演	1987	グループ黎明（大阪市）	変型 / リーフレット / 日文
ONE KOREA 1987：8・15民族未来創造フェスティバル	1987	「8・15」民族・未来・創造フェスティバル実行委員会（大阪市）	B5 / チラシ / 韓日文
カラ文化情報（創刊号）	1987	カラ文化情報センター（大阪市）	B5 / 12頁 / 日文
青雲（第64号）	1988	財団法人朝鮮奨学会（東京都）	A5 / 84頁 / 韓日文
耽羅（第1号）	1988	日本耽羅学会（八尾市）	A5 / 210頁 / 韓日文
青丘文化（第41号）	1989	青丘文化ホール（大阪市）	B5 / 12頁 / 日文
第13回社団法人韓国青年会議所海外地区会員大会	1989	韓国大阪青年会議所（大阪市）	B5 / 66頁 / 韓日文

(5) 企業・事業所

IBJ（第263号）	1983	国際料飲（大阪市）	A4 / 49頁 / 日文
韓国屋〔メニュー〕	1983	韓国屋（大阪市）	変型 / 12頁 / 日文
COMPANY PROFILE	1984	末広バルブ製作所（大阪市）	A4 / 64頁 / 英・中（簡）・韓・日・アラビア文
少年少女のためのわかりやすい韓国民族の歴史	1984	ソウル書林（大阪市）	A5 / 160頁 / 韓日文，金忠一（訳編）
朝鮮語大辞典（補巻）	1985	角川書店（東京都）	B5 / 103頁 / 韓日文
基礎ハングル（第7号）	1986	三修社（東京都）	A5 / 76頁 / 韓日文
韓譯萬葉集 三	1987	成甲書房（東京都）	A5 / 457頁 / 韓日文，金思燁（訳）
1989 우리실업인들 [わが実業人たち] 在日韓国人実業名鑑<関西版>	1989	共同新聞社（大阪市）	B5 / 1150頁 / 韓日文

(6) 公共団体

신간선（新幹線）	1985	日本国有鉄道・海外鉄道技術協力協会（東京都）	A4 / 16頁 / 韓文
やさしい日本語：日本語会話中級	1986	NHK国際局（東京都）	A5 / 101頁 / 韓日文，NHK大阪放送局制作部（編集）
朝鮮語図書目録：東京都立中央図書館蔵	1986	東京都立中央図書館	B5 / 98頁 / 韓日文

(7) その他

セマウル運動	1982	近畿大学出版部（東京都）	A5 / 316頁 / 日文，神谷康介（著）
韓国と滋賀県との友好関係史鈔	1987	第4回日韓糖尿病シンポジウム事務局（大津市）	B5 / 12頁 / 韓日文，雨森正高（著）
第3回定期演奏会	1988	大阪府立阿倍野高校吹奏楽部（大阪市）	B5 / チラシ / 日文
儒者姜沆の記念碑を大洲に	1989	姜沆記念碑を建てる会（大阪市）	B5 / 8頁 / 日文

出所)「KBS作品集：1968年～2017年」(社内報『ナルゲ』51号，2018年)に掲載された主要制作物のうち1980年代の分を抽出した。ただし現物と対照のうえ一部を修正した。

注) 左列から「タイトル」「刊年」「発行者」「備考」。「備考」の「中（簡）」は中国語簡体字。

ムの導入後、東京からの依頼が増えたという本節の検討と符合する。

制作物の形態としては、一枚もの(端物)が多かった前稿表 2 に対して、定期刊行物や書籍など、いわゆるページ物が目立つようになった。とくに東京の発注者に関するものは、ここに現れる限り、全てページ物であった。このことも、電算写植システムの導入によってページ物の受注が増えたというこれまでの検討と符合している。

このように発注者や制作物の形態の広がりにかかわらず、何らかの形で韓国・韓国語と関係する制作物が多いことも指摘できる。1988 年の新聞記事は、「ハングル関係の印刷の仕事は全体の七〇パーセントを占める。最近では日本人からの仕事が増えた」と報じている¹⁰⁶⁾。この時期の僑文社は、1970 年代に続いて関西地方の在日コリアンのコミュニティにおける印刷需要に応じるのと同時に、ハングル印刷に技術的優位を持つ専門企業として、一般の印刷市場のなかで全国的な地位を確立していたのである。

2. 多言語印刷・翻訳業への展開 (1990～2003 年)

1968 年の事業引き受けから 20 年以上にわたり高仁鳳の個人企業として経営されてきた僑文社は、1989 年 12 月 16 日に株式会社の設立登記を行い、あわせて社名をケイビーエス株式会社と変更した。対外的には翌 90 年 1 月 1 日から名称を変更した¹⁰⁷⁾。

社名をケイビーエスに改称した理由について、高仁鳳は、1990 年の新聞インタビューで次のように答えている¹⁰⁸⁾。「[僑文社には] ハングルのみの印象が強く、それを払拭したかった。もちろん大きく飛躍したいからです。K は僑、B は文、S は社の頭文字です」。また、「ハングル、出版、多言語の三本柱で行きたい」とし、「ハングルの何千文字、英語、仏語の百文字を組み立てる多言語を自社開発した。多言語は英、仏、日、韓、ロシア、東欧まで可能になる」と強調している。1987 年に導入したリョービの電子組版システムは、縦横の座標で文字を拾うため、光学式の文字盤さえあればハングル以外の言語にも拡張可能であったことから¹⁰⁹⁾、このような発想が生まれたのであろう。

ただし、この段階で多言語での制作が実際にどの程度行われたかは確認できない。多言語制作が本格化したのは、1991 年に Apple 社製のマッキントッシュ機 (以下 Mac) を導入してからのことであった。本節では、この問題を中心として、2003 年末に高仁鳳が社長を退任するまでのケイビーエスについて扱う。

(1) DTP 化と多言語システムの構築

Mac 導入の経緯

ケイビーエスにおける Mac の導入は、組版工程の DTP 化と切り離すことができない。

DTP（デスクトップ・パブリッシング、またはデスクトップ・プリプレス）とは、汎用パソコン上の組版ソフト（DTPソフト）で組版を完成し、その状態で印画紙や製版用フィルムに出力する組版方法である。それまでの電算写植システムや電子組版システムでは、文字と画像を同時に扱うことが難しかったのに対し、DTPソフトでは文字と画像を同時に扱い、最終的なレイアウトをモニターで視認できるばかりでなく、その形で出力までできたため、組版工程が大幅に短縮された。従来の専門的なシステムに比して圧倒的に廉価な汎用パソコンで操作ができたこともあって、DTPの出現は、それまでの印刷業のあり方を大きく変化させた。DTPソフトはまずMac向けに開発されたため、印刷業界でMacが急速に普及する契機ともなった。アメリカでは1980年代半ばからDTP化が進行していたが、文字数の多い東アジアでは対応フォントを開発する必要から普及が遅れ、日本では1989年にモリサワがDTPに対応したPostScript形式のフォントを発売したことをきっかけに、DTP化が進んだ¹¹⁰⁾。

ケイビーエスにおけるMacの導入は、1980年代末からのソウルでの事業展開と連動していた。先述のように高仁鳳は、1987年のRECSシステムの導入にあたり、ハンゲルの書体を増やすため、ソウルから文字盤を購入した。その過程で、これを仲介した印刷材料の会社の営業マンと連絡を取るようになり、1991年7月からケイビーエスのソウル支社の名義で仕事を委ねることになった。当初は、(株)公文教育研究会から受注した韓国向け学習教材を現地で制作することが主な目的だったようである¹¹¹⁾。前節で見たように、高仁鳳は少なくとも1988年頃から韓国に入力作業などの一部を移すことを考えていた。在日コリアンの韓国投資は1960年代から活発に行われていた¹¹²⁾。高仁鳳も、バブル経済期の日本の賃金上昇や人手不足を受けて、ソウルへの進出を構想したのだろう。

ケイビーエスのソウル支社は1995年頃まで機能したようだが¹¹³⁾、印刷物の制作という点で言えば、大阪とソウル間のデータのやり取りになお技術的な制約があったこと等から、必ずしも所期の目的を達しなかった¹¹⁴⁾。しかし、これがMac導入のきっかけになったことは、高仁鳳が1992年夏ごろに書いた次の文章から推測される。

KBSの一台目のMAC, IICiのボディの横に<91年6月29日導入>というシールが貼ってある。つまり、KBSにMACが入ってから、ざっと1年になるわけだ。振り返ってみると、昨年〔1991年〕公文からの仕事をソウルに一部作業を手伝ってもらうことになり、ソウル支社を設立した。ソウルでの作業はMACでやっていたので、それならデータも共用だし、大阪でもMACを導入しようと思い、まず、1台目を入れて私が触わり始めたのである¹¹⁵⁾。

先述のようにソウル支社の開設は1991年7月であり、高仁鳳は、これを準備する過程で

Mac に出会ったのだろう。この文章の続く部分によれば、その頃すでに大阪での取引先の中にも Mac を使う企業が現れていたが、高仁鳳自身は触れたこともなかった。導入後の 1 年間、毎月 5 ～ 6 冊の Mac 関係の本を読みあさって何とか要領が分かった状況だと述べている。

ただし高仁鳳がそれまで Mac に注目していなかったわけではない。1994 年の雑誌インタビューでは、「ハングルができるかどうか、常にシステム導入の選択基準。Mac は 5 年前はまだ期待していなかったのが、2 年ぐらい前に System 6.0.7 を見て案外速そうに思え、韓国ではフォントが 12 書体もあったので、これはいけると思った」と述べている¹¹⁶⁾。先述の RECS システムで利用できたハングルが 7 書体であったことと比較すれば、Mac にはさらに豊富な書体が備わっていたことになる。

当時の印刷業界の状況について、高仁鳳は次のように振り返っている。「日本の印刷業界では、Mac は画像処理やデザイン関係に入り、文字組版はやはり電算写植が主であった。その時に韓国に行ってみると、韓国では既に組版に活用していた。電算写植は設備が高いので、中小の印刷屋ではなかなか導入できないということで、Mac が入っていた。組版を見ると、なかなか良くできている」¹¹⁷⁾。日韓双方の印刷業界を見比べられる立場にいた高仁鳳は、日本とは異なる発展の経路をたどっていた韓国業界の状況を見て、Mac による DTP の将来性を確信したのである。

Mac の導入とあわせ、これを運用する人員も確保した。まず 1991 年夏ごろ、高仁鳳は、アルバイトとして雇用した韓国からの留学生高暎子に Mac の修得を指示し、書籍を読ませたり、ソフトウェアの講習に通わせたりした¹¹⁸⁾。次いで 1992 年には日本人のシステムエンジニア 1 名を雇用し、4 月から高暎子とともに社内部署「MAC 部」を立ち上げさせた¹¹⁹⁾。一方で、1991 年秋には、高仁鳳が広報委員長を務める協同組合の会報を Mac で組版し、モリスワの出力機を借りて製版フィルムに直接出力した¹²⁰⁾。1992 年 4 月には社内報『ナルゲ』を創刊し、高暎子を編集長として、Mac による DTP で作成させた(図 10)¹²¹⁾。まずは、こうした営業外の制作物を通じて DTP のノウハウを獲得していったものと思われる。

Mac による多言語同時組版

高仁鳳が Mac を導入する際、決め手の一つとなったのはハングル書体の豊富さであったが、

図 10 社内報『ナルゲ』創刊号(1992 年)



注) 編集長高暎子・編集 Mac 部

ケイビーエスの業務に Mac を利用する上では、日本語との混植が必須であった。

高仁鳳が購入した頃の Mac のオペレーティング・システム (System6.0.7) では、日本語版 (漢字 Talk) と韓国語版 (ハンゲル Talk) に互換性はないものとされ、初期状態では両言語を同時に利用することは不可能であった。これについて高仁鳳は次のように回想している¹²²⁾。

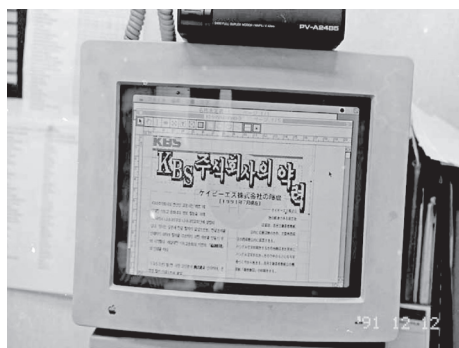
私はそこで日本語と韓国語が一緒にできる、混植ができる方法を考えた。システムを混ぜればいい。つまり、日本語の漢字トークと韓国のハンゲルトークを混ぜる方法を考えた。そしてとにかく混ぜると、日本語と韓国語が同時にできるシステムになった。それならと中国語システムを混ぜてはと、チャイニーズトークを混ぜた。すると、中国語ができた！日本語、韓国語、中国語の3カ国語が同時に動くシステムができた。この3カ国語は2バイト文字だ。文字の数が多い。あとの言語、英語やフランス語、イタリア語などは全部1バイト言語で簡単にできる。これで、多言語システムが完成したのである。

高仁鳳が「システムを混ぜる」と表現した具体的な方法は明らかでない。しかし別の回想では、ScriptMover というソフトを利用することで「Mac で日本語と韓国語が同時に動くようになった」としている¹²³⁾。ScriptMover は、徳島県のソフトハウスである(株)マキエンタープライズが1990年に開発した、多言語処理を目的とするソフトウェアであり¹²⁴⁾、Mac の複数のシステムを同時に稼働させられるものであったと考えられる¹²⁵⁾。高仁鳳がこの方法で多言語化にたどり着いた時期は明らかでないが、1991年7月にはマキエンタープライズ社と接触していたことが確認でき、多言語の混植も、マック導入後のかなり早い時期に可能になったものと考えられる (図11)¹²⁶⁾。

こうして獲得された多言語混植の技術を用いて、ケイビーエスが最初に送り出した営業上の制作物が何だったかは明らかでない。しかし1992年4月の『ナルゲ』創刊号では、「5月からアラビア語、タイ語、ポルトガル語等、多国語単語の本がMAC部を中心に作業されます」とあり¹²⁷⁾、韓国語以外の語学教材がまず制作されたようである。

語種によっては入力作業を外注し、社内ではそのデータを用いて組版だけを行ったようだが¹²⁸⁾、少なくともタイ語についてはタイ人留学生などをアルバイト雇用し、入力から社内で行った¹²⁹⁾。タイ語制作物の受注も増えており、1992年10月の『ナルゲ』第6号では、受注

図11 Mac 上での日韓混植組版 (1991年)



注)「KBS 株式会社の略歴」という文書が作成されている。1991年12月12日撮影。

中の業務として「①ミニミニタイ語、②ビジネスタイ語、③ひとり歩きのタイ語、④ 10 カ国語カラオケ (一部タイ語)、⑤ 8 カ国語会話 (アジア編、一部タイ語)」を挙げている¹³⁰⁾。

高仁鳳は同じ 1992 年の新聞インタビューで、「タイ語の仕事がこんなにたくさんあるとは思わなかった。今までタイ文字と日本語は混植できなかったので、別々に打って切り貼りしていたんですね。しかしマックなら何カ国でも混植でき、一発で出力できる」と語っている¹³¹⁾。高仁鳳は、Mac の導入を契機に、これまでは混植ができなかった言語にあえて制作物の幅を広げようとしていたのではないかと思われる。逆に言えば、既に RECS システムなどで成熟した混植技術を確立していた韓国語などの言語については、急いで Mac での DTP に切り替える必要はなかったとも考えられる。

タイ語に関する業務がスタートした頃の様子を、高仁鳳は次のように回想している。

プリンターで出力した韓国語や中国語を会社の表に貼りだした。それを見たある青年が、自転車に乗って通りがかり、これを見て入ってきた。川村さんだ。若い青年で、中国など東南アジアに関心のある青年だ。ちょうどタイ語関係の仕事が入ってきている時だったので、彼にその話をすると、大阪外大のタイ語を勉強している学生を紹介してくれた。さっそくその人を通して、タイ人留学生のアルバイトに来てもらった。タイ語の Mac システムやタイ語フォントも手に入れることができ、タイ語の仕事は完全にできるようになった¹³²⁾。

偶然の出会いを通じてタイ語の入力者やオペレーションシステム、フォント等を確保できたことが語られているが、その背景には、日本とタイの間の人的交流の増加があったと考えられる。1980 年代後半から在日タイ人数は急速に増加しており、例えば外国人登録者数は 1986 年 2,981 人から 1992 年 10,460 人、1997 年に 2 万人を超えた¹³³⁾。こうした中でタイ語印刷物の需要も増えていたと考えられ、Mac を導入したばかりのケイビーエスは、こうした市場の動きをうまく捉えることに成功したと言える。タイ語以外の言語による制作についても、この時期の急速な人流の拡大がその背景にあったことは間違いないだろう。

こうして 1992 年には、ケイビーエスの業務が急速に多言語化していった¹³⁴⁾。Mac は 1991 年に導入した IICI のほか IIFX が導入されて 2 台態勢となり、これによって組版作業を行ったほか、タイ語・ベトナム語などは入力もこれによって行った。一方でそれまでも扱ってきた日本語や韓国語、英語などの入力には PC9801 機を用い、そのデータをポストスクリプト形式に変換した上で、Mac の組版ソフトに貼り付ける方法をとった¹³⁵⁾。1993 年になっても、入力は基本的に PC9801 上の多言語ワープロソフト (高電社「テクノメイト」、KOA - 文書の後継バージョン) で行われたほか、国際的な互換性が高く、韓国や中国のデータを処理しやすいと言う理由で DOS/V 機 (IBM 互換機) も導入された¹³⁶⁾。この時期には従来の RECS システム

等もまだ稼働しており、テキストをパソコンで分散入力した上で、内容に即して組版方法を変えるというプロセスがひとまず定着したと考えられる。

「多言語システム」の完成

ケイビーエスでは、1992年までにMacを利用して多言語組版を行うようになっていたが¹³⁷⁾、その出力には制約が大きかった。詳細は不明だが、400dpiの印画紙出力が限界だったといい、品質には不満があったようである¹³⁸⁾。しかし1993年9月9日にイメージセッター（印刷用の大型出力機）を導入したことで、製版フィルムへの出力まで社内で完結できるようになった。解像度も3000dpiまでとなり、飛躍的に向上した。このイメージセッターには、自社開発した多言語対応のソフトRIP（Raster Image Processor、データを出力可能な形に変換するプログラム）を組み込んだといい、高仁鳳はこれをKBSマルチリンガルイメージセッターと呼んだ。使用できる基本言語は英語、日本語、中国語、ハンゲル、タイ語、アラビア語で、欧州の各言語も含めれば20言語以上が同時出力できたという¹³⁹⁾。

このイメージセッターは、ソウル支社を通じて韓国で調達された。高仁鳳は日本への輸送に先立って自らソウルに足を運び、ハンゲル30書体と日本語3書体をインストールして動作をチェックした¹⁴⁰⁾。イメージセッターの詳細は不明だが、高仁鳳は後に、「日本には多言語ができるイメージセッターがなかったので、ソウルから購入した」と述べている¹⁴¹⁾。先述のように、韓国の印刷業界は日本とは異なる経路をたどって発展し、DTPの普及に関して言えば、日本よりも先行していた。これは1980年代初頭の電算写植システム開発時とは大きく異なる状況であり、高仁鳳の立場から見れば、韓国の印刷業界と直接に接触できることが、日本での競争上、有利に働くようになっていたのである¹⁴²⁾。

高仁鳳は、このイメージセッターの開発・導入を、ケイビーエスの多言語システムの完成と表現し、電算写植システムの導入、RECSシステムの導入に次ぐ「第三の革命」だとして、強く自負した¹⁴³⁾。1994年2月には高仁鳳がMac World Expo/Tokyoに招かれ、多言語関係の分科会で登壇したほか¹⁴⁴⁾、一般むけの新聞・雑誌でもケイビーエスの多言語印刷が相次いで報道された¹⁴⁵⁾。高解像度のイメージセッターで多言語を同時出力する技術が、その当時であっては先進的なものと評価されていたことが窺われる¹⁴⁶⁾。高仁鳳はこのイメージセッターを自社で利用するだけでなく、他社の出力業務を請け負ったり、システムそのものを販売したりする構想も持っていた¹⁴⁷⁾。

一方でこのイメージセッターは、出力できるサイズが小さく、日本語の書体に制限があるなどの問題があった。またシステムも脆弱で、しばしばトラブルが発生した¹⁴⁸⁾。そこで1995年9月に2台目¹⁴⁹⁾、1997年4月に3台目のイメージセッターが導入され¹⁵⁰⁾、そのたびに出力サイズと品位が向上した。Macや各種のアプリケーションについても、バージョンアップ

にあわせて入れ替えられていったと思われる¹⁵¹⁾。さらに 1998 年までには Windows の DTP ソフトによる多言語組版も行うようになっていた¹⁵²⁾。一方で既存の RECS システムも 1998 年末時点では一部用途でまだ利用されていたが、画像を含まないテキストの出力しかできない等の制約が多く、近い将来に利用を中止するものと考えられていた¹⁵³⁾。

このように目まぐるしい設備の更新が、ケイビーエスの制作物の高度化に結びついたことは言うまでもない。ただしその全てが積極的な戦略に基づく選択であったかは疑問も残る。同業者間の緊密な分業によって成り立つ印刷業の特性から、業界の急速な技術革新に後れを取るわけにはいかないという条件も無視できなかつたと思われるからである¹⁵⁴⁾。ケイビーエスは日本の多言語 DTP における先駆者であったが、その地位を保ち続けることは容易でなかつた。そうした高仁鳳の危機感と取り組みは (2) で改めて触れる。

(2) 制作物の多言語化とマルチメディア化

制作物の傾向 (1990 ~ 2003 年)

ここでは表 1 と同様、「KBS 作品集：1968 ~ 2017 年」をもとに、1990 年から 2003 年までの制作物の傾向を検討しよう (表 2, 49 点)。

表 2 のうち、区分 1 ~ 4 は在日コリアンが運営する、あるいは韓国に拠点を持つ非営利的

表 2 ケイビーエスの主要制作物 (1990 ~ 2003 年)

(1) キリスト教会

福音聖歌 (韓日対照)	1995	純福音アジア総会	A5/454 頁 / 韓日文, 大阪純福音教会文書宣教会 (編)
-------------	------	----------	----------------------------------

(2) 民族学校

建国ニュース (第 4 号)	1993	白頭学院 (大阪市)	タブロイド / 4 頁 / 韓日文
第 55 回 建国祭 건국제	2000	白頭学院 (大阪市)	B5/58 頁 / 韓日文

(3) 韓国政府機関

初級韓国語	1997	大阪韓国総合教育院 (大阪市)	B5/102 頁 / 韓日文
駐名古屋大韓民国総領事館新庁舎開館式	1997	駐名古屋大韓民国総領事館	B5/18 頁 / 韓日文

(4) 各種民族団体

大阪韓国人商工会 写真で見る 35 年誌	1990	大阪韓国人商工会	A4/152 頁 / 日文, ケイビーエス株式会社編集室 (編集協力)
「国際化」のわすれもの：隣人としての外国人を考える	1990	在日韓国・朝鮮人問題学習センター (大阪市)	A5/109 頁 / 日文, 田中宏・リングホーファー=マンフレッド・徐正禹 (著)
コリア就職情報 (第 13 号)	1990	コリアファミリーサークル (大阪市)	B5/140 頁 / 日文
済青春秋 (第 40 号)	1991	済州青年会 (大阪市)	変型 / 68 頁 / 日文
高麗会報 (第 15 号)	1992	高麗学士倶楽部 (大阪市)	B5/310 頁 / 韓日文
四天王寺ワッソ	1993	「四天王寺ワッソ」事務局 (大阪市)	A4/20 頁 / 日文, 年は推定
색동 [セクトン] II 音楽編	1993	색동회 (セクトンへ) (京都市)	A4/92 頁 / 韓日文
祭祀の伝統と望ましいあり方	1994	関西済州道民協会 (大阪市)	A5/102 頁 / 日文, 金容海 (著)
第 23 回ウリマル雄弁大会	1995	韓国大阪青年会議所・서울 [ソウル] 青年会議所	B5/76 頁 / 韓日文
1995 年版会員名簿	1995	大阪韓国商工会議所	B5/236 頁 / 韓日文

(5) 企業・事業所

韓国特集 한국특집 <企画のご案内 기획안내>	1990	朝日新聞社広告局 (東京都)	A4/4頁/韓日文
SONGS FOR TAIWAN 雷射碟影精選集	1990	日光堂 (大阪市)	A4/417頁/中(繁)日文
自動車用語 8ヶ国語辞典	1991	トヨタ自動車・トヨタ技術会 (豊田市)	A5/780頁/日・英・独・西・葡・インドネシア・タイ・中(簡)文
한국어・이 (韓国語・2)	1993	ケイビーエス (大阪市)	A5/186頁/韓日文, 金禮(著)
月刊東アジアレビュー (第45号)	1995	エーアイビー (東京都)	B5/24頁/日文, 東アジア総合研究所(編)
本名は民族の誇り	1996	碧川書房 (大阪市)	A5/222頁/日文, 金容海(著), 1974年版の復刻
OSAKA DOME	1997	大阪シティドーム (大阪市)	A4/4頁/韓文
済民日報日本語版 (第6号)	1997	済民日报社 (済州市)	ブランケット/8頁/日文
한국어・일 (韓国語・1) (第2版)	1998	ケイビーエス (大阪市)	A5/152頁/韓日文, 金禮(著)
SONGS FOR KOREA 한국가요 [韓国歌謡]	2000	日光堂 (大阪市)	A4/112頁/韓日文
Mmulti-Bits IMAGE 카탈로그 [カタログ]	2000	ミスミ (東京都)	A4/416頁/韓日文
「家庭保育園」たのしい絵カード 1500 アジア編	2000	日本学校図書 (大阪市)	B5/139頁/韓中(簡)日文
にほんで, まなぼう Studying in Japan	2000	進研アドコンテンツ開発部 (豊中市)	B5/チラシ/韓・中(簡)・中(繁)・英・日文, 同企画のウェブサイトも制作
입문한국어 (入門韓国語)	2001	ケイビーエス	B5/83頁/韓日文, 金美求ほか(編)
AW WORLD WIDE (No.4)	2001	アイシン・エイ・ダブリュ(安城市)	A4/11頁/英文
入門ハングル文法と会話 (新訂版)	2002	南雲堂 (東京都)	A5/205頁/韓日文, 姜求榮(著)
やさしく覚える『韓国語入門』	2003	アプロ社 (大阪市)	B5/119頁/韓日文, 金敬子ほか(著)
BMB 外国曲早見表 vol.2	2003	ユーズ・BMB エンタテイメント (東京都)	A4/504頁/韓・中(繁)・比・日文

(6) 公共団体

환경해권 지방정부 실무대표자 회의 [環日本海圏自治体実務者会議, プログラム]	1995	鳥取県庁	B5/2頁/韓文, 露版・中(簡)版もあり
CONCISE GUIDEBOOK OF THE CITY OF KITAKYUSHU: KOREAN	1996	北九州市国際交流協会	変型/18頁/韓文
우리고장 이쿠노: 이쿠노구의 개요와 사적 안내 [わがふるさと生野: 生野区の概要と史跡案内]	1997	生野区役所 (大阪市)	A4/16頁/韓文
市民防災マニュアル	1997	大阪市市民局安全対策課	A4/21頁/英・韓・中(簡)・葡・西・日文
SAPPORO 札幌観光指南	1998	札幌市役所	変型/リーフレット/中(繁)
KANSAI Tourist Passport	1998	Kansai Tourism Welcome Guide Promotion Council (大阪市)	A5/123頁/英文
チュモニ 주머니	1999	大阪市教育委員会	A4/29頁/韓日文
신들의 고향 시마네 神々のふるさと島根 시모노セ키 시세요람 [下関市勢要覧]	1999	島根県商工労働部観光振興課	変型/リーフレット/韓文
국민연금 [国民年金]	2001	神戸市保健福祉局	A4/29頁/韓文
국민연금 [国民年金]	2001	神戸市保健福祉局	B5/リーフレット/韓文, 英文版・中文(簡)版・越文版・西文版もあり
神戸市 [市勢要覧]	2001	神戸市計画調整局	A4/32頁/中(簡)文
大阪一生活的享受地: 大阪的生活指南 (엔joy오이・오오사카 中国語版)	2002	大阪市市長室秘書部国際交流課	A4/110頁/中(簡)日文
仙台市にお住いの外国人の方へ (国民健康保険のしおり)	2003	仙台市役所	A5/7頁/韓日文, 中(簡)版もあり

(7) その他

バーン・ラオ (第 2 号)	1994	ワラボラ (大阪市)	タブロイド/4 頁/タイ日文
はじめての朝鮮語 (改訂版)	2001	都立高等学校同和教育研究会 (東京都)	B5/119 頁/韓日文, 東京都立南葛飾高等学校定時制朝鮮語教育推進委員会 (著)
나가사키 국제 대학교 [長崎国際大学校]	2003	長崎国際大学 (佐世保市)	A4/6 頁/韓文, 中 (簡) 文版・英文版もあり

出所) 表 1 に同じ。

注) 列の意味は表 1 に同じ。「備考」の「中 (簡)」は中国語簡体字, 「中 (繁)」は中国語繁体字, 「西」はスペイン語, 「葡」はポルトガル語, 「越」はベトナム語を指す。

な組織・団体に関する制作物である。そのうち最も多い「4. 各種民族団体」の発行元となっているのは、ほとんどが大阪に拠点を持つ団体である。高仁鳳自身も長く役員を務めた済州青年会や、これを含む済州出身者の 4 団体が 1993 年に合同してできた関西済州道民協会 (現在の関西済州特別自治道民協会)¹⁵⁵⁾、大阪韓国人商工会 (1953 年創設) とその後身である大阪韓国商工会議所などは、大阪の在日コリアン社会の中で長く活動してきた団体である。一方、1980 年代から盛り上がった就職差別撤廃運動に関わる書籍・雑誌 (在日韓国・朝鮮人問題学習センター¹⁵⁶⁾、コリアファミリーサークル¹⁵⁷⁾) や、1990 年に大阪興銀が主導して立ち上げた、日韓交流の歴史を顕彰する催し「四天王寺ワッソ¹⁵⁸⁾」のパンフレットなどは、在日コリアンの定住化と市民的権利の獲得をめざす動きを反映したものといえる。

こうした多様な民族団体のほか、在日大韓基督教会や韓国民団、民族学校 (白頭学院建国学校) からの受注も継続していたが¹⁵⁹⁾、表 2 にはほとんど現れない。表 1 と同様、これらに関する制作物は技術的にも成熟しており、新規性を認めにくかったためであろう。

以上のような在日コリアンや韓国の非営利団体に関する制作物が、おおむね大阪での頒布を念頭に置いていたと考えられるのに対し、「5. 企業・事業所」と「6. 公共団体」に見える発行元は全国に分布している。この二つの区分に属する制作物は、表 1 で見た 1980 年代にも一定の点数が見られたが、表 2 の時期に至って一層増加している。そして 1980 年代には、それらの多くは韓日混植によるものだったが、1990 年代以後になると、『大阪の生活指南』(中国語簡体字) のような韓国語以外の言語によるもの、また『自動車用語 8 ヶ国語辞典』や『市民防災マニュアル』(6 言語併記版) のような 3 言語以上の混植によるものが見られるようになった。Mac による多言語混植技術の獲得が、ケイビーエスの顧客と制作物の幅を大きく広げたことが改めて確認できる。

こうした多言語制作物の相当部分が、日本を訪れる外国人観光客や、日本に定住する外国人住民の増加に対応したものであったことも注目される。その最も分かりやすい例は、「6. 公共団体」に属する外国人向けの観光ガイドや生活ガイドである。「7. その他」に含まれる『バーン・ラオ』も、大阪の国際協力団体がタイ人の定住者を対象として発行した生活情報誌である (図 12)¹⁶⁰⁾。また「5. 企業・事業所」のなかに 3 点含まれているカラオケの目次本は、外国語の歌詞に日本語のルビを振るなど高度な組版技術を要し、ケイビーエスの主要制作物の

一つであった¹⁶¹⁾。これも様々なレベルでの人的交流の活発化を反映したものとと言える。

新たに来日したニューカマーを念頭においた制作物は、韓国語のものについても確認できる。「1. キリスト教会」に見える『福音聖歌 (韓日対照)』は、韓国の新興プロテスタント教団である純福音教会のもので、こ

の教会は1990年代からニューカマーの韓国人たちを対象として、急速に日本での教勢を伸ばしていた¹⁶²⁾。また表2には挙がっていないが、ケイビーエスが1992年から韓国語の翻訳・組版を担当した雑誌『バーン・ラオ』は、定住外国人を念頭に日・中・英・韓の4言語対訳で制作された生活情報誌だった¹⁶³⁾。

ケイビーエスでは、僑文社時代から韓国に進出する企業向けの印刷物を制作していた¹⁶⁴⁾、前節(2)で見たように、1984年には電算写植システムを利用した多言語併記の企業案内も作成している。こうした企業の海外進出に伴う印刷物の制作は、1990年代にも引き続き行われていたが¹⁶⁵⁾、それと並行して、日本を訪れ、居住する外国人をターゲットとする制作物が急増したのがこの時期の特徴だと言える。

さて先述のように、表2に現れているのはケイビーエスの代表的な作品として選定されたものであり、必ずしも制作物全体の傾向を反映しているわけではない。その一部を窺わせるものとして、1998年下半期(6~12月)の語種別制作点数・売上高を整理した数値が残っている(表3)。これによれば、この期の制作点数は1,209点、売上高は9,237万円であった。そのうち「日本語」のものは261点(全体の21.7%)、売上高は2,749万円(29.7%)に止まり、制作の中心が外国語にあったことが改めて確認できる。

図12 『バーン・ラオ』第4号(1995年)



表3 ケイビーエス言語別売上高(円, 1998年下半期)

	件数	%	売上高	%	単価
韓国語	337	28%	17,250,445	19%	51,188
中国語 中国	248	21%	17,515,955	19%	70,629
台湾	107	9%	8,503,950	9%	79,476
小計	355	30%	26,019,903	28%	73,296
日本語	261	22%	27,492,130	30%	105,334
英語	48	4%	3,031,397	3%	63,154
タイ語	25	2%	707,175	1%	28,287
ロシア語	10	1%	450,660	1%	45,066
ベトナム語	2	0%	42,000	0%	21,000
2カ国語	90	8%	6,901,020	8%	76,678
3カ国語以上	58	5%	8,317,890	9%	143,412
その他	23	2%	2,221,065	2%	96,568
新規先	50	4%	1,900,906	2%	38,018
合計	1,209	100%	92,372,785	100%	76,404

出所)「言語別売上状況」(1998年か、ケイビーエス社内資料)。下半期(6~12月)の合計。

注)印刷物以外の業務(翻訳等)も含むか不明。「新規先」の語種も不明。合計欄と各語種の合計に不突合があるが原表の値のまま。語種の表記も原表のまま、「中国語」の「中国」は簡体字、「台湾」は繁体字を指すと思われる。

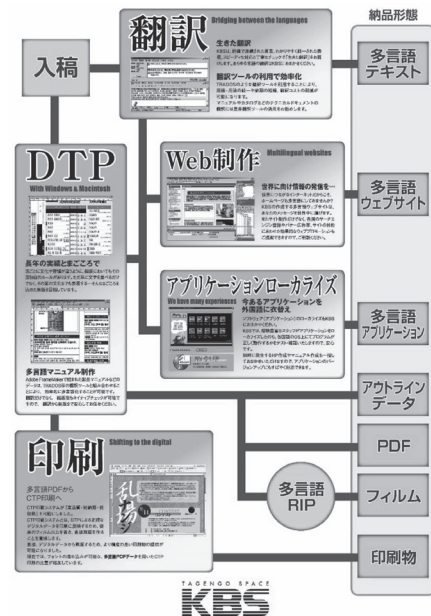
表 3 に見える外国語の中では、「中国語」(台湾＝繁体字, 中国＝簡体字)のものが点数の 29.5%, 売上高の 28.1% を占めて最も多く, 僑文社の時期から扱われてきた「韓国語」(点数の 28.0%, 売上高の 18.7%) を上回っている。その他, 英語・タイ語・ロシア語・ベトナム語での制作も, 少数だが行われている。そして多言語の混植を示すと思われる「2 カ国語」「3 カ国語以上」は, あわせて点数の 12.3%, 売上高の 16.5% であり, 無視できない比率を占めていることが分かるとともに, 1 点あたりの単価が高い(とくに「3 カ国語以上」の制作物の単価は全区分の中で最も高い)ことも確認できる。

最後に制作物の形態についても触れておきたい。前稿で見たように, 活版印刷では文選・組版と印刷が一連の工程をなしていたが, オフセット印刷では組版(写植→印画紙→製版用フィルム)と印刷(刷版→印刷)が分離し, それぞれ専門化が進んだ。僑文社では 1972 年に手動写植機を導入した後, 製版機やオフセット印刷機も順次導入し, 社内で一貫生産できる体制を整えたが, 印刷工程は複雑かつ高コストであり, 内製するメリットは大きくなかった。1982 年に電算写植システムを導入した後, 僑文社では組版工程の高度化に重点を置き, 印刷工程は外注にシフトしていったと考えられる¹⁶⁶⁾。

その中で, 顧客からの受注の形態としても, 最終的な印刷物ではなく印画紙もしくは製版フィルムでの納品, つまり組版工程だけを受注するケースが現れた。前節で見た角川書店『朝鮮語大辞典』補巻や, 三修社『基礎ハングル』はその早い例にあたる。そうした組版工程だけの注文は次第に増えていったようであり, Mac 導入後の 1993 年の新聞記事は, 「ハングル組み版の注文が急増, 以前は印刷部門の受注が主流だったが, いまは八〇% が組み版作業だ」としている¹⁶⁷⁾。さらに 1990 年代の終わりになると, 印画紙やフィルムのほか, データ形式での納品も行われるようになった¹⁶⁸⁾。

また多言語の制作では, 日本語の原稿を受け取って社内で翻訳することが多く, そこから派生して, 翻訳だけの受注も増えていった¹⁶⁹⁾。DTP 組版のノウハウをもとに, 1999 年には各種言語のアウトラインデータや PDF データ制作を代行する同業者向けのサービスも開始した¹⁷⁰⁾。2000 年頃からは, 多言語でのホームページ作成も受注するようになった。表 2 の「Study in Japan」ホームページ(株式会社進研アド,

図 13 ケイビーエスの業務内容 (2004 年)



注) 2004～06年の展示会等でパネルとして掲示されたもの。

2000年)の韓国語版・中国語版作成はその初期の例であり、ケイビーエスは同社の韓国へのPRも引き受け、韓国の日本語学校などに宣伝したという¹⁷¹⁾。2001年には、日本製アプリケーション・ソフトの多言語化(韓国語版・中国語版の作成)も行った¹⁷²⁾。

図13は、高仁鳳が社長を退任した直後、2004年頃の業務フローを図解したものである。この時期までにケイビーエスの制作物の多言語化が進んだのと同時に、サービスの形態も急速に多様化していったことが分かる。

市場と競争環境への認識

見てきたような制作物の傾向から、1990年代に入り、外国人の訪日や居住の増加が外国語印刷をめぐる市場や競争のあり方を大きく変えたことが分かる。高仁鳳自身も、こうした変化についての見解を多数残している。例えば1994年の講演原稿には、長く携わってきたハンゲル印刷における環境の変化について、次のように述べている。

私は25年前にハンゲルを日本に広めようとハンゲルの印刷業を始めました。その時はハンゲルの活字が日本になく、また韓国との交流もそれほど盛んではなく、ハンゲル活字を作るため、その字母から作り始めました。そして、在日韓国人の学校、領事館、民団、教会、親睦団体、また個人の結婚招待状を印刷しました。日本の会社関係からも少しずつハンゲル印刷の注文が入りました。

そのうち、次第に在日韓国人の社会ではハンゲルの使用が減っていきました。結婚招待状も日本語でするようになりました。それとは反対に、日本社会が国際化するのに伴い、ハンゲルの印刷物を使うようになりました。

1970年に大阪で世界万国博覧会「EXPO'70」がありました。そのパンフレットは日本語と英語はあっても、ハンゲルや中国語はほとんど使われていませんでした。ところが「EXPO'90」花博の時にはハンゲル、中国語などの外国語印刷物が多く現れました。また日本国内に多くの外国人が入ってきました。東京のある区庁ではハンゲル新聞を発行しています。私どもも、いまやハンゲルだけでなく、多国語をしなければならないと考え、3年前からシステムの開発に入り、今回それが完成しました¹⁷³⁾。

僑文社の初期、ハンゲルによる在日コリアンの結婚招待状(請牒状)が重要な制作物となっていたことは前稿で述べた通りである。在日コリアンの世代交代に伴って、同胞のコミュニティにおけるハンゲル印刷物の需要が減る一方、外国人定住者や観光客の増加を背景として、日本社会全体でハンゲルをはじめとする外国語印刷の需要が増えていったこと、それがケイビーエスの多言語システムの開発の契機となったことが説明されている。

また 1995 年に行われた業界誌の座談会では、多言語印刷をめぐる市場環境の変化について、関西地方の場合に引き付けて、次のように説明している。

今までは海外へ出す製品に外国語の仕事が派生していたのですが、最近では国内で販売される製品のパンフレットのなかにも多言語が用いられるケースが増えてきております。外国人の訪日が増えて、外国語を必要とする印刷物の需要が増えてきているのです。〔中略〕大阪では、関西国際空港（関空）の開港〔1994 年 9 月 4 日〕により、外国語関係の仕事が活発化してきており、開港前より鉄道、百貨店などいろいろな業種で多言語を多用するようになってきました¹⁷⁴⁾。

ここでも、訪日外国人の増加による日本国内での多言語化の進行が、多言語印刷の需要につながっていることが強調されている。

こうした市場の変化のなかで、いち早く Mac による多言語組版のノウハウを確立したケイビーエスは、業界の先行者として有利な立場にあったと考えられる。1998 年の新聞記事では「現在、目にする多言語の印刷物のほとんどは同社が製版したものだ」「今では数カ国語同時入力ソフトなども開発され、後追い業者も出始めているが、世界規模でのマルチ言語製版は同社の独壇場だ」とあり、感覚的な表現ではあるが、ケイビーエスがこの時期なお、多言語組版において相当の優位性を保持していたことが分かる¹⁷⁵⁾。

しかし高仁鳳は状況を楽観的には見ていなかった。1993 年の段階で既に、「マックが世界の主役になると確信しているが、それは怖いことでもある。印刷屋を介在させずに、何でも自分で作れるのだから。大手がすでに、自社内で印刷物の製版をしており、印刷関連業者が影響を受けている」との危機感を新聞のインタビューで表明している¹⁷⁶⁾。Mac の端末上で組版が可能となったことが、印刷業界の環境を大きく変える可能性を認識していたことが分かる。さしあたり業界内部で起きた変化について、高仁鳳は 1994 年の業務ノートに次のように書き留めている。

2 年ほど前から、MAC 導入をし、いままで、韓国語中心であった仕事を中国語、タイ語、ベトナム語など、多言語の方へ広げた。〔中略〕「多言語イメージセッター」の導入をすることにより、ますます多言語処理が充実してきて、いまや、この分野では「日本一」といえる。ところが、一般印刷業界が不況になり、いままでは外国語などをとりあつかっていたのが、それらを取りあつかうことになって、その組版を KBS の方に下うけに出すようになった。しかも、それらの量が、ふえつつある。そこで、下うけに出していたものを社内でやろうとする動きがみられる。このままでは、あぶない。いままでは受け身の営

業をしていたが、エンドユーザー向けに営業展開をする。エンドユーザと直接とり引きを
すると、安定する。ターゲット：関西新空こう、そのテナント。ホテル、日本橋電キ街。ぼ
うえき会社、大使かん、領事かん¹⁷⁷⁾。

バブル経済崩壊後の不況のなかで、印刷物の受注が取り合いとなったこと、これまで一般業
者がしり込みしていた外国語印刷もその例に洩れなかったことが分かる。そうした状況にあっ
てもケイビーエスでは、組版工程の下請けという形で受注を確保できていたが¹⁷⁸⁾、それは多
言語組版の技術的優位があつてこそそのことであり、同業者間に技術が普及すれば、そうした優
位はただちに崩れてしまう恐れがあつた。引用文から分かるように、高仁鳳はエンドユーザー
との直接のつながりを強化することによって、安定した受注を確保したいと考えていたよう
である。例えば関西空港開港に伴う新規需要は、高仁鳳がまさに確保したいと考えていたもの
の一つであつた。

しかし Mac による組版作業がより標準化・一般化されれば、エンドユーザー自身が競争者
に転じることになる。1997年の業界紙の座談会で高仁鳳は、かつての電算写植では顧客がシ
ステムを持つわけにはいかなかったため、すべてのデータを印刷業者が管理することができ
た、しかしパソコンの普及によって顧客の側でも同じデータを扱うことができるようになり、
加工データの引き渡しを求められる場合もある、これは印刷業者にとっては「自縄自縛」の状
況だ、と述べている¹⁷⁹⁾。

Mac 上の多言語入力についても、System7.1（1992年12月発売）以後のオペレーション・シ
ステムでは特別なソフトを準備する必要がなくなり、言語ごとの Language Kit も個々に購入
できるようになった。それは競争条件の大きな変化を予期させるものであつた。高仁鳳は
1996年のノートで次のように心情を吐露している。

ランゲージキット（23,000—ぐらい）、アラビア、ヘブライ、ロシア語。今までは、他ではで
きないから、やむなく KBS に仕事を出してきた。しかし、このようにだれでもができるよ
うになってから、どこでも、多言語の仕事が可能である。しかし KBS に多言語の仕事を受
けるためには、品質がいいこと、サービスがいいこと。マルチメディアに対応できるよ
うにすること。出力に関して、もっと気をつかって¹⁸⁰⁾。

先に見たように、高仁鳳が多様な顧客を開拓し、さらにマルチメディアでの制作に矢継ぎ早
に進出していったのも、こうした厳しい競争環境のなかで新たな優位を確保するための模索で
あつたと言ってよい。

(3) 制作体制の変化

「Mac 部」設置後の制作体制

高仁鳳は 1991 年 6 月末に Mac を導入した後、翌 92 年 4 月に社内部署「Mac 部」を設置し、Mac による制作を営業に取り入れた。その後の制作のプロセスについて、高仁鳳の 1995 年頃の業務ノートは、「進行のパートは、①翻訳・ワープロ、②電算写植、③マック、④制作(印刷・版下)の 4 部署(パート)に分かれます」としている¹⁸¹⁾。そして納品までの経路は、次の 4 通りに分けられるとする。

- A) ①翻訳・ワープロ→②電算→納品
- B) ①翻訳・ワープロ→③マック→納品
- C) ①→②→④制作→納品
- D) ①→③→④制作→納品

また、それぞれ、翻訳のみとか MAC のみなど、その部署だけで納品する場合があります。

いずれも翻訳とワープロ入力に始まるが、A と B は「電算」もしくは「マック」の処理後、ただちに納品に至るもので、組版工程だけの受注と考えられる。「電算」はモリサワの電算写植システムもしくはリョービの RECS システムを指すのであろう。A・B いずれにおいても、組版結果は印画紙もしくは製版フィルムの形で納品されたと見られる(先述のように 1990 年代末までにはデータ納品も行われるようになったが(注 168)、この資料の時期にそれを開始していたかは明らかでない)。C と D の場合は、さらに印刷工程を経て、印刷物の形で納品されたと考えられる。

ただしこうした納品までの工程が、社内で完結していたわけではない。例えば印刷工程については、既に述べたように、1980 年代末には完全に外注に移行していたと思われる。1990 年代の社内・社外の分業体制について、「1995 年度経営計画」という資料¹⁸²⁾に掲載された組織構成および外注先リストをもとに検討したい(表 4、表 5)。

表 4 は、社内の組織構成である。兼任を除く人員数は 23 名で、パート・アルバイト形態の者も含まれたが¹⁸³⁾、ケイビーエスの役員および直接雇用の従業員と見てよい。林芳子の記憶によれば、現地出身のソウル支社長を除く 22

表 4 ケイビーエスの組織構成(1995 年)

社長：高仁鳳，専務：林芳子		
Mac 部	部長 1	Mac 担当 6
制作部	部長 1	翻訳担当 1 (* 1) 総務担当 2 工務担当 1
電算部	部長 1 (* 2)	組版担当 2 ワープロ担当 4
営業部	部長 1	営業担当 1
東京支社	支社長 1	
ソウル支社	支社長 1	

出所)「1995 年度経営計画」(ケイビーエス社内資料)に基づき整理。

注) * 1 翻訳担当は専務が兼任。

* 2 電算部長は営業部長が兼任。

表 5 ケイビーエスの外注先構成（1995年）

業種	業者数	詳細（カッコ内業者数）
Mac	2	アラビア語翻訳・写植（1）、組版・訂正（1）
印刷	9	簡易製版・製本（1）、軽印刷（1）、コンピュータ伝票印刷（1）、シール（1）、伝票印刷（活版）（1）、名刺印刷（2）、モノクロ印刷（1）、不明（1）
加工	4	箸袋・紙（1）、不明（3）
写植	6	欧文（1）、デザイン（1）、タイ語（1）、中文（2）、組版（1）
製版	4	カラー製版（1）、不明（3）
製本	3	製本（小物）（1）、不明（2）
電算	1	RECS組版・訂正（1）
版下	2	一般版下（1）、新聞・チラシ版下（1）
不明	1	不明（1）
翻訳	10	英語・欧文（1）、英文（2）、韓文（1）、中文（2）、ベトナム語（1）、ロシア・欧文（1）
ワープロ	2	データ入力（1）、ワープロ入力・組版（1）

出所）表4に同じ。

名のうち、高仁鳳を含む8名が在日コリアン、5名が韓国からのニューカマー（新一世）、5名が日本人、2名が中国人、1名がタイ人だったとのことであり（1名は明らかでない）、在日コリアンがなお多数を占めていたものの、構成員の多様化が進んでいた¹⁸⁴⁾。

社内の部署はMac部、電算部、制作部に分かれている。Mac部の構成員は部長含め7名だが、実際にMacを利用して組版作業を行っていたのは2名に過ぎず、他の5名はPC9801機などのワープロソフトを利用して翻訳・入力作業を行っていた。5名のうち2名は中国語、1名はタイ語を担当するパート社員だった。

電算部の構成員も7名で、部長を除く部員6名の内訳は、組版担当2名、ワープロ担当4名である。組版担当者は電算写植システムもしくはRECSシステムを直接操作して組版を行ったと考えられる。ワープロ担当者はMac部と同様、ワープロソフトを利用して翻訳・入力を行っていた。この4名はいずれも韓国人であり（在日コリアン二世1名・

ニューカマー3名）、韓国語の翻訳・入力が主な業務だったと推測される。翻訳・入力の担当者のなかで、Macにより組版していた語種の担当者がMac部に、韓国語を含むそれ以外の語種

図14 ケイビーエスのスタッフ（1990年代）



上の写真は1991年11月、前列左から3人目が高瑛子。Macはまだ営業利用されておらず、電算写植のオペレーターのほか、ハンゲルのワープロ入力担当者が3人、日本語が2人いた。下の写真は1995年1月、Mac専門の社員が入社したほか、タイ人や中国人の入力担当者が増員された。壁面にケイビーエス「多言語印刷システム」のポスターがある。

の担当者が電算部に振り分けられていたと見てよい。先述のように Mac による制作はそれまでのシステムでは対応できない語種から始まっており、Mac の導入までに制作技術が成熟していた韓国語については、移行が相対的に遅くなったのだろう。

制作部 5 名のうち、翻訳 (専務兼任) は直接に翻訳業務を担当するというより、社外の翻訳者との連絡・調整が主な業務であった。また工務担当者は制作の段取りをし、レイアウトや校正なども担当するほか、顧客や外注先との調整も行った。外注先を含む工程間の調整・管理が制作部の主な業務であったと言える。

次に表 5 から外注先の構成を見よう。あわせて 44 業者・個人が現れ、その委託内容も多岐にわたっている。最も多い外注先は「翻訳」であり、ケイビーエスの多言語印刷が社内の翻訳・入力担当者に加え、外部翻訳者によっても支えられていたことが分かる。翻訳者の他には、「印刷」や「製本」など社内に設備を持たない工程はもちろん、「写植」や「電算」、「Mac」など、設備を社内に保有していた工程についても外注が行われている。繁忙時の作業量調整のため外注が行われたケースもあっただろうが、タイ語や中国語の写植など専門的作業については、なお社内では対応できないものもあったと考えられる。

このうち翻訳業務は、少なくない部分が留学生のような流動的な人材によって担われていただけに、安定した態勢の構築には困難を伴った。高仁鳳の 1994 年夏頃のメモでは¹⁸⁵⁾、今後のケイビーエスの課題として、技術的な発展と長期的な経営計画に加え、「多国語印刷を行うために外国人技術者を確保」することを挙げている。その具体的な方法は、寄宿舎を設けて留学生に安価に提供し、ケイビーエスでアルバイトをしてもらうこと、卒業・帰国後も連絡を保ち、その国との関係を維持することが構想されていた。

留学生用の寄宿舎を作るというプランは実現しなかったが、高仁鳳は同時期の新聞・雑誌記事で少なくとも二度同じ構想を語っている。そのうちの一つでは次のように述べる¹⁸⁶⁾。

外国人留学生には優秀な人が多いのですが、経済力の格差のために、彼らは劣悪な環境の中で暮らさざるを得ない状況に置かれています。そして、アルバイトも日本人が敬遠するような肉体労働や皿洗いなどしかありません。これでは彼らの優秀な頭脳を活用できる機会がなく、日本という国のイメージを悪化させることになりかねません。それで当社でアルバイトをしていただく代わりに、食住や生活費を支援して、能力を有効に活用していただけるようにしたいのです。

高仁鳳の外国人留学生への関心の背後に、入力オペレーターとしての有用性に加え、貧しきなか学業のため日本に再渡航した自身の経験があったことは想像にかたくない。

情報通信技術の活用

前節で見たように、高仁鳳は1988年にパソコン通信に加入し、1990年代後半にはニフティサーブのコミュニティを通じて翻訳者を募ったり、外国語に関する情報を収集したりしていた¹⁸⁷⁾。1995年12月にはインターネットサービスにも加入し¹⁸⁸⁾、1996年1月から日韓中英の4カ国語からなるホームページを開設した¹⁸⁹⁾。顧客が大阪近辺に限られていなかったこと、在宅の外部翻訳者とデータのやり取りをする必要があったこと等から、情報通信技術への高仁鳳の関心は、早くから高かったと思われる。1997年頃には、海外在住者も含めた翻訳者とのやり取りはほぼ電子メールで行われるようになり、ケイビーエスでは10以上のアドレスを開発して対応していた¹⁹⁰⁾。

遠隔地間の通信によって可能となった仕事として、済州道で発行されていた新聞『済民日報』日本語版の制作が挙げられる（図15）。済民日报社の金孝晃会長からケイビーエスに日本語版の作成依頼があったのは1997年1月であった¹⁹¹⁾。金孝晃自身も大阪の在日コリアン2世であり、韓国語の読み書きができない在日コリアンに韓国のニュースを届けたいという思いから、日本語版の発行を決断したという¹⁹²⁾。

図15 『済民日報』日本語版第6号（1997年）



ケイビーエスは1997年2月から日本語版の制作を開始した¹⁹³⁾。毎週木曜日の発行、ブランケット版8ページで、うち2ページがカラーで印刷された。制作のフローは次のようであった。(1) 済民日報本社から同大阪本社に韓国語記事を電子メールで送信。(2) 大阪本社で記事を選別のうえ翻訳し、電子メールでケイビーエスに送信。またファクスで手書きの割り付け案を送る。写真・広告は済州の本社からケイビーエスのウェブサーバーに直接送る。(3) ケイビーエスのMacでこれらを組版する。組み上がりした後、プリンターで校正刷を出力し、大阪本社にファクスで送り校正を依頼する。毎週火曜日までに編集を終え、水曜日に新しい記事との差し替えと最終チェックを経て製版フィルムに出力、夕方5時にバイク便で印刷会社に運び、午後9時に刷り上がるというスケジュールであった¹⁹⁴⁾。

当初はケイビーエスで作った組版データをオンラインで済州に送り、済州本社でフィルム出力することを考えていたというが、済州本社のイメージセッターで日本語フォントが正確に出力できず、実行されなかった。印刷コストを抑えるため、ケイビーエスでフィルム出力の後、木曜日午前の航空便でこれを済州に送って輸転機で印刷し、午後便で大阪に戻すという方法も試行されたが、これも本格的には実施されなかった¹⁹⁵⁾。まだオンラインだけでは作業を完結

できない技術的な条件の下、様々に試行錯誤されていたことが窺われる。

『済民日報』日本語版の制作は長続きせず、1998年秋までには中止されていたようである¹⁹⁶⁾。しかし2000年には、韓国で頒布するためのカタログを東京の発注者と大阪のケイビーエス、ソウルの印刷所の3地点間でデジタル情報をやり取りしつつ完成させるなど¹⁹⁷⁾、情報通信技術を活用した遠隔地間の分業により制作する手法は、数年のうちに安定して運用できるようになり、定着していったと考えられる。

おわりに

高仁鳳は2003年末にケイビーエスの社長を退任し、2004年1月から子の高允男(고윤남, コウ・ユンナム, 1968年～)が経営を引き継いだ。その後も高仁鳳は、2012年に死去するまで、会長として事業に関わるかたわら、民族活動や地域活動にも積極的に参加した。社長退任直前の2003年1月には、社屋の一室を「Tagengo Space KBS まだん」と名付け、韓国語教室や韓国映画の上映会など、様々な催しに開放した。生涯を通じて韓国と韓国語に深い関心を持ち続けたことが窺われる。

高仁鳳は1968年1月から2003年末まで、36年間にわたり僑文社・ケイビーエスの経営者の立場にあった。印刷技術から見ると、手差しの活版印刷機からスタートした同社の活動は、1970年代に手動写植機を中心とする形に移行し、1980年代には電算写植システムの導入をはじめとする電算化、1990年代にはMacによるDTP組版の採用と、ほぼ10年ごとに大きな転機を迎えている。こうしたケイビーエスの技術的变化は、印刷業全体の変化を的確に捉えたものであったのと同時に、韓国語をはじめとする外国語印刷に新技術をいち早く応用したという点で、先駆的なものであった。

これにともなって僑文社・ケイビーエスの制作物も大きく变化した。それは技術的な可能性の広がりや踏まえたものであるのと同時に、市場の動きを反映したのもでもあった。

高仁鳳が経営を引き受けた当時の僑文社は、在日大韓基督教会をはじめとする大阪の在日コリアンの需要に応じて、韓国語を含む印刷物を提供していた。手動写植機の導入によって、より効率的な組版が可能となると、それまで中心だった一枚物の印刷物だけでなく、ページ物と呼ばれる図書や雑誌の印刷も引き受けるようになったが、その顧客は1970年代末までなお在日コリアンが中心であったと見られる。

1980年代になると、ページ物の受注がさらに増えただけでなく、その顧客も東京をはじめ、全国の大手出版社や旅行業者、韓国と取引のある民間企業に拡大した。その理由としては、僑文社が日本でほぼ唯一ハンゲル対応の電算写植システムを導入し、その後も電算化を推し進めて技術的優位を確立したことに加え、日本企業の韓国への進出や、日本人の韓国・朝鮮への関

心の高まりなどを背景として、在日コリアンに止まらず、一般の印刷市場においても韓国語への需要が急速に伸びたことが挙げられる。

さらに1990年代には、制作物の言語が韓国語以外にも拡大し、3言語以上の混植も行われるようになった。加えて、翻訳やマルチメディア・サービスの分野にも進出した。こうした変化は、Mac導入による多言語組版システムの構築を直接の契機としているが、その背後には、訪日観光客や外国人定住者の増加に伴う日本社会そのものの多言語化の進行があった。創業以来手がけてきた韓国語印刷についても、オールドタイマーである在日コリアン向けの印刷から、ニューカマーの韩国人をターゲットとした印刷への転換が見られた。

このように僑文社・ケイビーエスは、日本社会における韓国語、アジア語印刷への需要の変化に敏感に反応しながら、そのサービスの内容を変化させていった。このことは、前稿の「はじめに」でも述べたように、エスニック・マイノリティの企業が同胞のコミュニティを超えて市場を開拓し、成長していった事例として意義深いものと思われる。

ところで、経営者の高仁鳳に焦点を当てると、上のような事業展開を可能とした理由として、リスクを恐れない進取性や韓国語印刷への情熱といった資質に加え、高仁鳳の属する世代や、その中で個人的経験の持つ意味が注目される。1941年生まれの高仁鳳は、日本の高度経済成長から安定成長にかけての時期に壮年期を過ごした。それが日本の印刷市場が全体として拡大する時期にあたっていたことは、高仁鳳が韓国語印刷というニッチな技術を武器に生き残りえた前提として、看過することはできない。また高仁鳳が二世として在日コリアンのコミュニティに身を置いていたことが、スタートラインにおける顧客の確保という意味で重要であったことも言うまでもない。

さらに高仁鳳が日本の敗戦後いったん朝鮮に戻り、少年期の約10年間をそこで過ごしたことは、韓国語の習得はもちろん、韓日両国の状況を複眼的に見わたす姿勢を養う上でも役立ったと考えられる。特に1990年代以後、高仁鳳がMacを導入し、多言語印刷システムを構築していく過程では、急速な進歩を遂げる韓国の印刷産業の状況が高仁鳳にとっての参照枠となり、韓国からの機材の導入も行われた。業界全体の目まぐるしい変化の中で、韓国と日本を比較しながら、将来性が見込まれる技術を選び取って導入する姿勢が、高仁鳳の優位性の一つを形作っていたように思われる。

在日コリアン二世は、日本社会の制度的・社会的な差別に直面しただけでなく、冷戦を背景とした国際関係の変転にも直接さらされる立場に置かれていた。そのため個々の二世の経験は極めて多様とならざるを得ず、そのことは暮らしの営みの中にも様々な形で反映されていた。生活と分かちがたく結びついたビジネスもその例外ではない。こうした在日二世の企業活動について、できるだけ多くのケースを記録することは、在日コリアンの歴史を掘り起こすために不可欠な作業であるのみならず、戦後日本社会の歩みを東アジア史の一部として理解するうえ

でも、大きな意義を持つはずである。

<注>

- 1) 高仁鳳「ああ、創業 30 年！これからも一歩先を進む」『ナルゲ』20 号, 1998 年 1 月。
- 2) 塚本勲『『朝鮮語大辞典』と『小辞典』の編纂をふりかえる』同著『朝鮮語を考える』白帝社, 2001 年, 49～90 ページ。また、「朝鮮語大辞典 23 年かけ完成」『朝日新聞』1986 年 1 月 5 日。
- 3) 塚本勲『朝鮮語を考える』82 ページ。以下、再掲の参考文献については著者名とタイトルのみを示すことにする。
- 4) 塚本勲への電話インタビュー (2021 年 11 月 6 日)。塚本のインタビューにあたっては藤井幸之助の助力を得た。このことについて、高仁鳳自身も、「この書物には韓国で組めない北朝鮮の言葉も収録されることから、日本向けの発行元の角川書店から、当時ハングルの活字と手動写植機を揃えていた当社に一部応援を頼みたいと声がかかった」と回想している（「日本唯一の先進システム誇る／ハングル電植機が威力／韓国語熟知のスペシャリスト——僑文社」『印刷百科』42 号, 1986 年 3 月）。なお『朝鮮語大辞典』上巻奥付によれば、組版を行ったのは大韓教科書株式会社であり、僑文社は「製版協力」として挙げられている。上巻「編者のことば」によれば、上・下巻には「大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に基本的に共通した語彙と大韓民国独自の語彙とを収め」、補巻では「朝鮮民主主義人民共和国独自の語彙を新しい共和国用語集として」まとめたという。
- 5) 補巻の印刷は横山印刷株式会社（東京都）で行われた。僑文社は組版結果を出力した印画紙ないし製版用フィルムの形態で納品したと考えられる。
- 6) 塚本勲への電話インタビュー（前掲）。
- 7) 角川書店で辞書編集の責任者であった佐野正利は 1998 年に次のように回想している。「最初に高仁鳳社長がご来社くださったときのいきさつはよく覚えていませんが、文京区にあった東京出張所に来られるといつも当社にお見えになり熱心に営業活動をされました。そういう中で当社が進めていた朝鮮語大辞典も原稿が準備出来、一部をお願いすることにしました」（佐野正利「「ハミオンテンダ」と「共生」の精神で前進を」『ナルゲ』20 号, 1998 年 1 月）。僑文社が文京区に東京支社を置いたのは 1985 年であり（後述）、『朝鮮語大辞典』の依頼よりも後であるため、佐野の記憶が錯綜している可能性もあるが、高仁鳳が支社設置以前から東京での営業活動を盛んに行っていたことは本文中で後述する通りである。
- 8) 「この辞典には、韓国の単語がのっている。韓国の単語なんてものは、無い。だいたい韓国という国が無い、あそこは朝鮮民主主義人民共和国の「남반부（南半部）」であって、アメリカ帝国主義が不法に占拠しているのである。だから韓国の単語のあるこの辞典は、けしからん、潰せというものであった」塚本『朝鮮語を考える』82 ページ。
- 9) 塚本勲は筆者の電話インタビュー（前掲）で、「共和国の語彙を収録した補巻なのだから、朝鮮総聯系の印刷業者に依頼することはできなかったのか」という趣旨の筆者の問いに、「できるはずがない」と答え、前注のエピソードを語った。
- 10) 布施茂（責任編集）『技術者たちの挑戦：写真植字機技術史』創英社／三省堂書店, 2016 年, 88 ページ。
- 11) 福田栄一・草柳隆三（編）『写植に生き、文字に生き：森澤親子二代の挑戦』ベンチャーコミュニケーションズ協会ビッグライフヒストリー編纂局, 1999 年, 168 ページ。
- 12) 高仁鳳ノート【A】1982 年, 日付なし。前後の記事から 1982 年 9 月に電算写植システムが導入された直後の記述と推測される。高仁鳳の業務ノートは 1970 年代末から断続的に残っているが、タイトル等はないものが多い。本稿では直接利用したものについて【A】～【I】の番号を付して区別し、書誌上の情報は文末の文献一覧に掲載した（ケイビーエス社内資料・社内報・高仁鳳個人資料、「高仁鳳ノート」の項）。また引用文中の〔 〕は石川の補足である（以下同じ）。

- 13) 注1 参照。また高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」(『ナルゲ』39号, 2008年1月)では、「写研とモリサワに相談したが、写研からは「まだ日本語の電算化も不十分なのに、ハングルの電算化は無理」と断られた。しかしモリサワは、当時の山本〔営業〕部長が「それやってみましょう」と対応してもらえた」とする。
- 14) 「1981年12月 写植機メーカーのモリサワへハングルの電算化を打診、取り組み始める」(「ケイビーエス株式会社の略歴(1990年1月現在)」作成時期不詳)。
- 15) 「大阪・先進グラフィックアーツ展：座談会「組版」」『なにわ』(大阪府軽印刷業協同組合・日軽印大阪府支部)53号, 1987年11月, 26ページ。
- 16) 高仁鳳ノート【A】1982年, 日付なし。前後の記事から1982年1月のメモと考えられる。「コンピューター写植導入の件。①ハングルの必要字をえらぶ。② 〃 配れつを考える。③外字をするときは。④英文タイプのような方式は？ 芳子と甥 鄭炳采〔鄭炳采, 前稿68頁参照〕が1月26日から30日までひるから約4時間モリサワへ講習に行った。電算写植機の入力の方法を学んだ。どのように文字を配置するかが問題だ」。
- 17) 「米製〔の機械〕にまず日本語のプログラムを入れるのだが、私がやったのはその日本語のプログラムを韓国語に置き換えただけのこと。簡単なことではなかったが、理屈はそう難しいものではなかった。漢字はそのまま使えるので、二千―三千のハングル文字を入れる。モリサワと共同で約一年かけて世界初のハングル写植機をつくった」(「ハングル電算写植・多言語同時電算出力：世界初で新境地拓く」『統一日報』5233号, 1993年2月5日)。また文字コード作成の困難について、「企業ルポ・僑文社：日本と韓国のかけ橋／ハングル文字印刷ひと筋」『日本印刷新聞』3298号, 1987年10月31日。
- 18) 『統一日報』2739号, 1982年8月17日。同日の紙面には「世界初ハングルワープロ：大阪・僑文社」という記事もある。その後、機械の稼働を報じた記事として「한글 写植機도 김퓨터화 [ハングル写植機もコンピュータ化]：大阪 生野区 僑文社」(『한국일보 [韓国日報] 日本版, 1982年9月5日)、「世界初のハングル電算写植機：生野・僑文社で稼働」(『統一日報』2776号, 1982年10月13日)がある。『한국일보』の記事の一部を訳出しておく。「このハングル電算写植機のキーボードにはハングル、漢字(韓国で使用される旧書体)、数字、英文など4,617字が配列されていて採字が簡単で、3倍の速度で行うことができ、校正はブラウン管を見ながら10倍の速度で行うことができる。また記憶装置として1枚のフロッピーに11万字を記憶でき、書籍1冊を全て記憶して任意に写植することができ、再発行も容易である」(原文韓国語, 石川訳)。
- 19) 高仁鳳から佐野正利(角川書店)へ、ファクス原稿, 1982年10月14日。なおロシア語に言及しているのは、当初、補巻には英語訳とロシア語訳を付する予定だったためと思われる。これは実現しなかった(『朝鮮語大辞典』補巻凡例)。
- 20) 本文中でも触れたように、この時期の電算写植システムは、入力だけができる入力機、モニターで入力結果を確認できる入力校正機、そして出力機で構成されていた。小規模な印刷業者の場合、入力校正機だけを導入し、出力はモリサワ本社もしくは専門の出力センターで行うのが一般的だった。モリサワ本社の出力機には、同社作成の高解像度フォントが納められており、利用者はフォント使用料と出力する印画紙の代金を支払った。印画紙の代金は出力延長に応じて課金されたが、よく利用する業者はあらかじめ自社用のロール印画紙を購入し、出力室に預けていた(三木武・村辻博見(モリサワ)へのインタビュー, 2022年8月8日, ケイビーエスにて; 村辻博見の筆者あてメール, 2022年9月2日)。僑文社で電算写植のオペレーターを務めた鄭炳采は、モリサワ本社での出力作業の苦心を語っている(石川亮太「鄭炳采さんに聞くケイビーエスの歩み：ハングル印刷から多言語印刷・翻訳へ」『ナルゲ』55号, 2022年1月)。
- 21) 高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」。
- 22) 三木武(モリサワ)の教示によれば、モリサワが韓国向けに発売した電算写植システムの場合、「日本語と韓国語のシステムですが、ハードウェアは同じで、当時の機械にはHDDというものが搭載されていなかったの、システムの立ち上げにはFD(8インチ)からソフトを読み込んで立ち上げ

るようになっていました。この FD が日本語システム、韓国語システムの二つあり、日本語として使う場合は日本語のシステム FD で立ち上げる、同様に韓国語システムとして使う場合には韓国語のシステム FD で立ち上げるという使い分けができていました」という (2022 年 8 月 1 日、筆者あてメール)。これは前注の高仁鳳の回想とも符合する。

一方で入力方式については不明な点がある。三木武によれば、韓国向けシステムについて、「ハングルの入力方法に関しては一から開発されたようで、今の PC でいうキーボード、当時は A/N キーボード (アルファニューメリック) と呼んでいたようですが、このキーボードを使ってハングル文字の一つ一つのエレメントを入力してその組み合わせで一つの文字を生成する方式を開発されたようです。ちなみに、日本語の場合は多段シフトキーという方式を採用しており、一つのキーに 9 つの文字が搭載されており、左手で 1 から 9 の数字を押しながらシフトキーを押すことで 1 から 9 のポジションに該当する一文字が入力されます。開発当初は韓国語システムについても日本語同様の漢字多段シフトキーに加えて A/N キーボードを追加した状態の機械を作っていました」という (同前)。

一方で僑文社の入力校正機について、『朝鮮語大辞典』の入力を担当した鄭炳熏は次のように述べている。「漢字は確か、右手で 1 つに 9 文字 (そのうち 1 文字が該当する文字) 入ったキーを押さえ、次に左手で該当する番号を押して選ぶ、というものです。原稿入力は、2 段階作業で、先に漢字を打っておいて、その後でハングル打ちということになります。ハングルは子音と母音の組み合わせで入力するわけですが、打つ時が問題。ハングル・シールを貼った透明カバーをかぶせ、しかるのちに、カバーごとバサバサと入力することになります」(鄭炳熏「僕を活かしてくれました：僑文社のこと」『ナルゲ』51 号、2018 年 1 月)。これによれば、ハングルの音素に分解して入力するという点は三木の記述と共通するものの、A/N キーボードではなく、多段シフトキーをハングル用に切り替えて用いるという点が違っている。この頃の僑文社の MCT10 の写真にも、A/N キーボードが写ったものはない (写真 2 参照)。モリサワの三木・村辻へのインタビューによれば (前掲)、ハングル用の機材で鄭炳熏が述べる形態のものは記憶にないものの、他の用途のものでは、システムを切り替えたうえで多段シフトキーにカバーをかぶせて用いることはあったという。

現時点でこれ以上の追究は困難だが、僑文社に納入された機材は、韓国向けに納入された機材と基本的に共通ではあるものの、僑文社の事情にあわせたカスタム化が加えられたもので、若干の違いがあったものと考えておきたい。

- 23) 三木・村辻へのインタビューによれば、創業者の森澤信夫はエンジニアとして顧客の必要に即した製品を提供することを旨とし、障がい者向けの写植機など、公式の記録には残っていない多くのカスタムメイドの製品を提供していた (前掲インタビュー)。森澤信夫が常にユーザーの声に耳を傾けながら製品改良を怠らなかつたことは、福田栄一ほか『写植に生き、文字に生き』(117～118 頁)にも記述がある。
- 24) 高仁鳳は後に、モリサワが「東南アジア [ママ] の方に進出する計画を持ってしまして、うちがいわばモルモットのような形になりまして共同で研究開発を始めたわけです」と回想している。「大阪・先進グラフィックアーツ展」(前掲)。
- 25) 「海外へ初のモリサワライノトロン 202」『モリサワのひろば [社内報]』11 号、1983 年 2 月。資料の閲覧にあたっては三木武の協力を得た。
- 26) 前注に同じ。「ハングルで電算写植を：僑文社」(『写植タイムス』155 号、1983 年) もモリサワの韓国向けシステムの開発が「昨年 [1982 年] 五月」に始まったとする。
- 27) 三木武が韓国向け電算写植システムの開発責任者 (当時) をはじめ、モリサワ OB 複数名に問い合わせて下さった。三木武の筆者あてメール (2022 年 7 月 28 日)。
- 28) 「ハングルで電算写植を」(前掲)。高仁鳳が「三和印刷」とするのは前注のモリサワ OB の記憶と齟齬するが、三和洋行と三和印刷がグループ関係にあったとすれば、三和印刷側が開発段階から関与していても不自然ではない。ただし両社の関係は未確認である。
- 29) 僑文社向けの電算写植システムの完成を報じる次の記事から、モリサワ側が当初はそれほど短期間

での実現を見込んでいたわけではないことが窺われる。「現在の日本語入力機にハンゲルをプラスした電算写植機を立案した高社長が、この案をコンピューター関連会社や写植機メーカー数社に問い合わせたところ、現時点での量産化は無理、という理由で断られたが、英国製コンピューターの「ライノトロン」を扱っているモリサワ・ライノタイプ社が「十年、二十年先の量産化をめざして」ということで、昨年から研究をはじめ、今月中に完成」（「世界初ハンゲルワープロ」前掲）。実際には僑文社の提案から1年以内で完成していたことを考えると、モリサワ側としては、三和洋行の提案により韓国への納入が現実化したことで、開発を加速化させた可能性がある。

- 30) この点については注 22 で詳述した。
- 31) モリサワの社内報によれば、1982年9月末に韓国の三和印刷に納入されたシステムの構成は、202EWT 出力機、MK10 入力機（10 台）、MCT10 校正機（3 台）、MK60 欧文専用入力機（1 台）であった。「海外へ初のモリサワライノトロン 202」（前掲）。
- 32) 福田栄一ほか『写植に生き、文字に生き』（前掲）169～172 ページ。
- 33) 布施茂『技術者たちの挑戦』（前掲）97～100 ページ。
- 34) 鄭炳熏のインタビュー（2022年2月25日、ケイビーエスにて）。
- 35) 例えば注 18 の『한국일보 [韓国日報]』記事参照。
- 36) これは当時の電算写植システムに共通する特徴であった。出版社や新聞社が多く立地する東京では電算写植が急速に普及した一方、商業印刷の多い大阪では手動写植機が遅くまで利用され、電算写植の普及が遅かったという（三木・村辻のインタビュー、前掲）。
- 37) 高仁鳳ノート【B】1984年、2月23日の項。「84／3 現在」と注記がある。「キカイ」はオフセット印刷機の担当を指すか。また「外注関係 製版4社 印刷6社 製本・加工6社」、「写植外注先多数」との記述もあり、前稿で見た1970年代と同様、多数の関連企業との分業が確認できる。
- 38) 活版機（プラテン機）は主に結婚招待状印刷のため1990年頃まで利用された。いむばんじゃ「ケイビーエスつれづれ記」『ナルゲ』20号、1998年1月。
- 39) 「日本唯一の先進システム誇る」（前掲）。これによれば1986年時点の入力校正機はMK110、MCT11、MK110-H2の3台であるとし、1982年に最初に導入されたMCT10は言及されていない。しかしMCT10の現物はケイビーエスに保存されており、1986年までに利用中止したとは考えにくいので、記事のMCT11はMCT10の誤記である可能性がある。なお三木武の教示によれば、MCT11は1983年、MK110は1984年に発売されたという（2022年8月9日、著者へのメール）。
- 40) 1987年10月発行の印刷業界誌でも「現在ハンゲルを電算システムでできるのは同社が唯一であるともいえる」とする（「企業ルポ 僑文社」前掲）。また当時を知るモリサワの社員も、ハンゲルの電算写植システムを日本国内で導入した例は僑文社以外に聞いたことがないという（三木・村辻のインタビュー、前掲）。
- 41) 高仁鳳、書簡下書き、1983年3月19日付。僑文社用箋に鉛筆書きで5枚。宛名はないが、内容から見て大阪興銀に提出するために書いた文書の控えと思われる。具体的には次のような言及がある。「過剰設ビ：電算写植システムなど。このシステムは韓国語システムなので約5,000万円のところ、1,000万円で使用しております。ちなみに日本語システムは4,000万円」、「電算写植システムは現在のところ未来のキカイで、いまのところ大阪でも大手の印刷会社社社しか持っておりません。僑文社のようなところでは過乗【ママ】といえます」。一方で「今までの組版能力より3倍は早くなる」、「名ボのような仕事は10倍にも、20倍にもその効果があがります」とその画期性を強調している。
- 42) 同前。済済青年会は大阪の済済道出身者団体であり、現在の関西済済特別自治道民協会の母体の一つである。前稿注 122 で述べたように、高仁鳳は1972年から済済青年会の機関誌『済青春秋』を印刷し、74年からその役員となっていた。
- 43) 三修社について、同社ホームページ>会社案内（2022年8月5日確認）のほか、同社の斎藤俊樹から教示を得た（筆者あてメール、2022年2月25日、3月1日）。
- 44) 『基礎ハンゲル』創刊号によれば、「本誌は三修社発行の月刊誌『基礎ドイツ語』、『基礎フランス語』と並んで、月刊 KOREA 語学習誌としては日本で初めて誕生しました」という。菅野裕臣「本誌の

編集方針とその内容『基礎ハングル』1巻1号, 1985年。

- 45) NHK「ハングル講座」について、南相環「NHK「ハングル講座」の成立過程にかんする研究ノート：日本人の韓国・朝鮮語学習にかんする歴史的研究（その2）」『金沢大学教養部論集』人文科学篇 32巻1号, 1994年。三修社『基礎ハングル』のタイトルもNHKにならった可能性があるが、明らかでない。前注で見たように、この雑誌では言語の名称を「KOREA語」としており、また編集後記では「「ハングル」とはKOREAの文字のことであって、KOREA語そのものではありません」と注記している（創刊号, 75ページ）。用語の選択に相当の苦心があったことが窺われる。
- 46) 印刷は創刊号から最終号まで東京都の壮光舎印刷㈱で行われている。僑文社は印画紙ないしそれを撮影した製版用フィルムの形態で納品したと考えられる。
- 47) 高仁鳳「私「鳳@ bong」とKBSの40年」。ただし高仁鳳が三修社を訪問した日時は高仁鳳ノート【B】で確認した。「金さんと三修社へ行き、その人とあった。専ム、編集員と、どうやら、いけそうだ。月刊誌を出したいとのこと。「기초 한글 [基礎ハングル]」64Pぐらいのものだが、印刷は大日本〔印刷〕でしている」（1984年11月8日）。「金さん」は東京支社を担当した金憲淑と思われる（注59の引用文）。印刷業者が実際とは異なる理由は不明（前注参照）。
- 48) 斎藤俊樹の教示による（筆者あてメール, 2022年3月1日）。「日本の本」展は日本書籍出版協会と日本雑誌協会が主催した見本市で、1984年5月18日から21日まで東京都豊島区のサンシャインシティで開かれた。「ズバリ2万9千点の本」『読売新聞』1984年5月19日朝刊（読売新聞ヨミダス）。
- 49) 藤田眞一「さらなる技術の発展に期待」『ナルゲ』20号, 1998年。
- 50) 「ケイビーエス株式会社の略歴（1990年1月現在）」。
- 51) かつての組版作業については、上間行洋「写植の思い出」『ナルゲ』35号, 2006年1月；同「組版の変遷」『同』51号, 2018年1月。
- 52) 前稿81～83頁。
- 53) 金思燁（訳）『韓譯萬葉集 一』成甲書房, 1984年。1987年の『三』まで僑文社の印刷で刊行された。『一』の序によれば、国際交流基金の助成によって刊行された。林芳子によれば、この組版は電算写植システムで行ったが、万葉仮名の一部文字にはシステムが対応しておらず、手動写植で打ち出したものを貼り込む等の工夫が行われたと思われる。
- 54) 高仁鳳ノート【B】、1984年6月7日の項に「今年4回目（？）の東京出張」とある。
- 55) 高仁鳳ノート【B】、1984年2月2日の項, 2月13日の項。
- 56) いずれも高仁鳳ノート【B】による。
- 57) 高仁鳳ノート【B】、1984年5月18日の項, 6月4日の項, 8月20日の項。
- 58) 「ケイビーエス株式会社の略歴（1990年1月現在）」。
- 59) 高仁鳳「私「鳳@ bong」とKBSの40年」。雑誌『ORIENT』（東亜経済社）は韓国の経済事情についての月刊誌で、僑文社が印刷していた。ケイビーエスには通巻65号（1980年）から通巻114号（1985年）まで保存されている（欠号あり）。
- 60) 林芳子の談話による。
- 61) 高仁鳳ホームページ（鳳@ bong の page）>「僑文社在日実業名鑑を編集」、2022年8月31日確認。以下、「高仁鳳ホームページ」とのみ記す。
- 62) 「企業ルポ／한글なら, おまかせ／僑文社（大阪府支部）」『軽印刷』409号, 1988年12月。
- 63) 社内報『ナルゲ』の発行所欄を見ると、15号（1996年1月1日）まで見られた東京支社の情報が、16号（同年6月1日）から見られなくなる。
- 64) 「ケイビーエス株式会社の略歴（1990年1月）」。「これも」というのは、1982年9月のハングル電算写植システムの導入について、同じ資料で「これは韓国本国よりも早く世界で初めて実用化された」としているからである。
- 65) 向井謙之のインタビュー（2022年5月25日, エス・ブイ・エフ本社にて）。1984年の末広パルプ会社案内は、向井氏のご厚意によって閲覧することができた。
- 66) 林芳子の談話による。

- 67) 鄭炳采のインタビュー（2021年8月29日、ケイビーエスにて）。また三木・村辻（モリサワ）のインタビュー（前掲）によると、末広バルブ製作所のパンフレット自体は記憶にはないものの、技術的には不可能ではなかったであろうという。
- 68) 末広バルブ会社案内の制作に協力した業者は特定できていないが、当時の大阪における中国語専門写植業者の事例として、株式会社友好社（大阪市城東区）を紹介しておく。林芳子によれば、僑文社（ケイビーエス）は、1990年代に自社内で中国語の対応が可能となるまで、中国語の写植業務のかなりの部分を友好社に外注していた。
- 友好社は1972年に社員3人で創業し、82年に株式会社となった。創業者は1935年大阪に生まれ、満蒙開拓団に加わった父とともに1944年に黒竜江省に移住、1953年に日本に戻った。中国語の能力を活用して写植業・通訳業を営むかたわら、残留日本人の帰国運動にも力を尽くした。ある時期には、西日本で写研製の中国語の文字盤を使っているのは友好社だけと言われるほど、中国語の写植が可能な業者は稀少であったという。萩野隆三（社長）のインタビュー（2022年7月1日、友好社にて）。また萩野の運営するブログ「中国、旋盤のち写植時々旅行」（2022年8月4日確認）。
- 僑文社・友好社のいずれも、その歩みが何らかの形で日本の植民地支配と関わっていることは、日本のアジア語印刷の歴史を考える上で示唆的である。
- 69) 高仁鳳ノート【B】、1984年5月21日の項、6月4日の項。
- 70) 「ハンゲル電算写植・多言語同時電算出力」、高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」。
- 71) 「フル稼働の同胞ハンゲル印刷所／文化発展への気概こめ」『統一日報』2843号、1983年1月21日。高仁鳳は電算写植機を導入した当初から、これを利用した情報処理に期待していた。導入直前の1982年8月の新聞記事は「電算写植機の特徴は、文字の大きさ、字体、校正を量に関係なく一気に機械処理することができ、名簿や会誌、新聞など、組み替えて再発行する予定のあるものに対して大きな威力を発揮する」と述べている（前掲「世界初ハンゲルワープロ」）。
- 72) 高仁鳳ノート【B】、1984年6月11日の項。実見したのは6月7日だとする。
- 73) 片貝孝夫・平川敬子『パソコン驚異の10年史』講談社、1988年、48頁。
- 74) 本文中で後述する大阪の高電社が1981年8月に日本初の日本語ワープロソフトとしてPC8000用の「WORD3000」を発売し、翌82年5月に「マイレター」を発売した。「高京徹（奥田喜久男の千日回峰）」『Weekly BCN』1780号、2019年。
- 75) 片貝・平川『パソコン驚異の10年史』63～66頁。
- 76) 公益社団法人日本印刷技術協会ホームページ>「ワープロから電子組版へ（1）印刷100年の変革」（澤田善彦著作集）、2001年9月15日付、2022年8月1日確認。なおモリサワの電算写植システムに対応したコンバートソフトについて、高仁鳳は次のように回想している。「1983年ごろ、大阪でキャッツサークルという研究会ができた。それはミチヤという会社の道家氏を中心となった、コンピュータを利用した文字組版の研究会で、早速参加した。ミチヤではワープロでテキストとファンクションを入力し、写研の文字写植のデータに変換するソフト「秀嶺」を作っている最中であった。私は道家氏に、それをモリサワ用にも作って欲しいと頼んでみた。それでテスト用に作ったものがうまくできた。／また、高電社から「KOA-ハンゲル」というハンゲルワープロが出てきた。そこで、ミチヤで作ってもらったモリサワへの変換ソフトを利用して、ハンゲルの文字コードと合わせてテーブルを作り、ハンゲルワープロからモリサワの電算写植に持っていく方法を考えた。／当時、電算写植の入力機は非常に高価だった。PC98にワープロ「松」と「KOA-ハンゲル」を載せ、「松茸」という日本語変換ソフトの辞書に写植コマンドを入れて、入力は外注に出せるようにした。アウトソーシングをどんどん使い、1台の入力機を、パソコンを利用してたくさんの人に入力してもらって効率を上げたので、仕事がどんどんできた。」（高仁鳳「日・中・韓を中心としたアジア言語組版処理」『Text & Graphics』9巻4号、2002年11月）。スラッシュ（/）は原文改行。コンバートソフト「秀嶺」については、㈱ミチヤ組版システム部「組版統合システム秀嶺シリーズの基本思想と概要」『印刷界』1986年3月号。ハンゲルワープロからの変換については本文中で後述。
- 77) 高仁鳳ノート【B】、1984年6月15日の項、6月20日の項。

- 78) 高仁鳳ノート【B】、1984年6月20日の項。
- 79) 電算写植システムの入力方式については注 22 参照。
- 80) 「日本唯一の先進システム誇る」(前掲)。なお三修社から『基礎ハングル』を受注する際にも僑文社が PC9801 を利用していたことが決め手の一つとなったようである。高仁鳳は 1984 年 11 月に三修社を訪問した際の様子を次のように回想している。「[三修社の] 前田専務の机の上にパソコン PC9800 が置かれ、それをさわっていた。私はその画面を覗いていて、「それはこうすればいいですよ」とパソコンの操作を指摘した。「お、あなたはパソコンを知っているのか」と目が輝いた。「はい、僑文社ではコンピュータを利用して組版をしています」との返事にすっかり乗り気になり、「今晚、めし一緒にしよう」と、天ぷら屋に連れて行ってもらった。このとき食べたてんぷらのおいしいこと、いまだに忘れられない」(高仁鳳「私「鳳@ bong」と KBS の 40 年」)。
- 81) 白頭学院創立 60 周年記念誌委員会(編)『建国：白頭学院創立 60 周年記念誌』学校法人白頭学院、2006 年、214～217 ページ(高基秀インタビュー)；(株)高電社ホームページ>沿革、2022 年 8 月 2 日確認。
- 82) 「ハングル電算写植・多言語同時電算出力」。
- 83) 高基秀は 1948 年の済州四三事件を逃れて故郷の済州島から光州に移り、朝鮮戦争の勃発後さらに大阪に渡航した(1951 年)。建国高等学校に編入・卒業後、早稲田大学を経て、大阪で同級生の営む電気工事会社に就職、しばらくして独立した。ソフトウェアの開発を手掛けるようになって最初に作ったのは、PC8001 に対応した「ハングル文字の 3 千字のフォント」で、これは世界でも初めてのハングルの電子フォントだったという。1981 年には本文でも述べた韓国語ワープロソフトを発売するに至った。白頭学院創立 60 周年記念誌委員会『建国』214～217 ページ。
- 84) 高仁鳳「私「鳳@ bong」と KBS の 40 年」。
- 85) 高電社の「KOA - 文書 [한글]」製品リーフレット(ケイビーエス所蔵)にも、「作成されたワープロ文書は [僑文社電算写植システム] により高品質の写植文字に変換することができます」とある。また 1987 年の業界誌記事は、僑文社が「KOR - 文書」[ママ] にハングルを混植することに成功したとして、「ミチヤの『秀嶺』を通せば電植ファンクションを付加することができ、ダイレクトに電植出力もできる。また、専用機で作成したデータをパソコンに逆コンバートできるのも大きな特徴。これによって専用機ではできなかった文字の情報加工業の分野に、今後は同社でも本格的に取り組む姿勢」として、その意義を強調している(「大阪・僑文社/日文・ハングルの混植がパソコン上で可能に」『MONZ』204 号、1987 年 9 月)。「秀嶺」とこれを利用したハングルワープロのデータ変換については注 76 を参照。
- 86) 「大阪・先進グラフィックアーツ展」。
- 87) 高仁鳳ホームページ>「僑文社在日実業名鑑を編集」、2022 年 8 月 31 日確認。
- 88) このほか信用組合大阪興銀に提出した資料でも、電算写植機の導入が名簿の作成に有利であることを強調している(注 41)。
- 89) 高仁鳳ノート【B】、1984 年 9 月 17 日の項。
- 90) 奥付タイトルは『1989 우리실업인들 在日韓国人実業名鑑<関西版>』共同新聞社、1989 年 3 月発行。編集「共同新聞社在日韓国人実業名鑑編纂室」、編集人「高仁鳳」、印刷「僑文社」。総ページ数 1,150 ページ。基本的に日本語だが、人名にハングルが併記されている。タイトルを「関西版」とすることから、他地域についてのバージョンを予定していた可能性があるが、実際には刊行されなかったようである。
- 91) 高仁鳳ホームページ>「僑文社在日実業名鑑を編集」、2022 年 8 月 31 日確認；「ケイビーエス株式会社の略歴(1990 年 1 月現在)」。
- 92) 高仁鳳「在日韓国人企業名鑑の印刷経緯」作成年不詳。顧客向けの説明資料と思われる。高仁鳳の肩書に僑文社とあることから 1989 年以前のものである。
- 93) 「ハングル 20 年同胞印刷所」『統一日報』4212 号、1988 年 10 月 8 日。また 1987 年の座談会記事では、「ネットワーク化」についての話題で、高仁鳳が「モデムと電話機さえあれば、すぐ文字デー

タは送れますから、話さえ合えばそう時間を掛けずにできると思います」と発言している（「大阪・先進グラフィックアーツ展」）。

- 94) 高仁鳳ホームページ>「僑文社在日実業名鑑を編集」。
- 95) 「企業ルポ／한글なら, おまかせ／僑文社（大阪府支部）」。
- 96) RECS200 の発売年はリョービ MH グラフィックテクノロジー(株)ホームページ>会社案内>沿革による（2022年8月2日確認）。「ケイビーエス株式会社の略歴（1990年1月現在）」では、RECSシステムの導入について次の3つの項目を挙げており、1980年代末にこの機材を利用した制作を拡大したことが分かる。「1987年8月 社屋を一部拡張。リョービ・組版システムを導入」、「1988年11月 リョービ・システムの入力編集機追加導入」、「1989年1月 リョービ・システムのレーザプリンター PP340 導入。RECSシステムの校正出しをより最終出力の状態に近づけることとレーザ写植の方向へも歩みだす。自社にてこのプリンターにハンゲルフォントを入れている」。
- 97) 公益社団法人日本印刷技術協会ホームページ>「ワープロから電子組版へ（2）印刷100年の変革」（澤田善彦著作集），2001年9月30日付，2022年8月12日確認。
- 98) RECS200 製品パンフレット（ケイビーエス所蔵）には「リョービの RECS200 は、従来の手動写植機の文字板がそのまま使える画期的な光学的電算写植機ですから、文字のもつ個性を大切にします。」とあり、既存文字盤との互換性は大きなセールスポイントであった。
- 99) RECS200 の特長について林芳子は次のように回想している。「10年前（1987～1988）：受付にはもう北村さんが座っていました。勝山通の工場は裏側を借りて少し広くなり、リョービレックス出力機がガチャガチャと音を立てています。それまではモリサワの本社へ毎日のように出力のため往復していましたが、悲願の自社内出力が可能になったのでした。しかも、写研書体が使えるのが大きなメリットなのです。」（いむばんじゃ「ケイビーエスつれづれ記」）。
- 100) RECSシステムの導入とカスタム化について、「ハンゲル文字組版の領域拡大にかける(株)僑文社」『MONZ』222号，1989年1月；高仁鳳「ああ，創業30年！これからも一歩先を進む」；同「私「鳳@bong」とKBSの40年」。カスタム化の内容については、2012年に大阪市で行った講演の資料で次のように説明している。「[RECSシステム上でハンゲルの]書体を変えるには、文字盤を変える。文字盤には文字盤番号が付けられていて、それを変えればよい。インターネットのサイトを作るHTML言語。この理屈を利用した。＜文字盤1＞明朝体＜／文字盤1＞＜文字盤2＞ゴシック体＜／文字盤2＞。逆変換システムも考える。文字校正は編集機で行うのは非効率的。逆変換して、PC98で文字校正をすると、効率が上がる。編集機の数に限られているが、パソコンは増やせる」（高仁鳳『ソウルと大阪の狭間で』2012年，私家版，20ページ）。林芳子によれば、高仁鳳は引用文中の逆変換システムを「ワッタガッタ」（왔다갔다, 行ったり来たり）と命名して、その革新性を強調していたという。
- 101) 「ハンゲル文字組版の領域拡大にかける(株)僑文社」。
- 102) 「[RECSシステムに使う]ハンゲルの書体は韓国から導入することにした。ソウルの印刷材料を扱う会社の営業マン、陳炳業さんと知り合ったが、彼の兄が写植の文字盤を製作していた。タイボス書体や丸ゴシック、ナール系などの書体を購入した」（高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」）。
- 103) 「ハンゲル文字組版の領域拡大にかける(株)僑文社」。
- 104) 第2節（2）で触れるように、僑文社では他の印刷業者の下請け作業も行っていたため、制作物の最終的な発行者と僑文社への直接的な発注者が一致するとは限らない。この点を一つ一つの制作物について確認することは現時点では難しいが、制作物の性格について初歩的な検討を行う上では、大きな障害にはならないと考える。
- 105) 林芳子の談話による。
- 106) 「ハンゲル20年同胞印刷所」。
- 107) 「ケイビーエス株式会社の略歴（1990年1月現在）」。
- 108) 「人：KBS株式会社社長高仁鳳さん」『東和新聞』2640号，1990年3月22日。『東和新聞』は大阪市浪速区に本社を置いた日本語の韓国系民族紙である。

- 109) 高仁鳳「ああ、創業 30 年！これからも一歩先を進む」。また次のような回想もある。「[RECS システムでは] コード変換プログラムも簡単にできた。ワープロの辞書のようなものだが、それを一括に変換するというので、私は「何でも変換プログラム」と言っていた。非常に便利に使えた。例えば文字盤に文字がずっと並んでいる。ワープロでこの文字を拾いたいときに文字盤のコード番号を決めて、この場所は前から 3 番目、上から 123 として、例えばワープロの中で k という文字は 123 の 3 と変換プログラムに入れておく。そして k と入力するとこの文字を開く。これをハングルでもロシア語でも何でも応用できた。／ RECS では、ハングル文字盤は 6 つだけですべて表現できる。漢字は日本語の漢字をそのまま使ったので、メインプレートはそのまま日本語の文字盤、サブプレートのところに 6 枚ハングルの文字盤を入れると、完全に日本語とハングルが混植できる多言語システムになる。それプラス欧文書体の文字盤を載せたりすると、どんどん増える。この方法を使って記号文字やカット類もすぐできた。RECS はいろいろな応用がきいた」(高仁鳳「日・中・韓を中心としたアジア言語組版処理」)。／は原文改行。
- 110) 日本における DTP 化の過程について、中西秀彦『学術出版の技術変遷論考：活版から DTP まで』印刷学会出版部、2011 年、301～309 ページ。なお同書は DTP をデスクトップ・パブリッシング (Desk Top Publishing, 卓上印刷) の略とするが、デスクトップ・プリプレス (Pripress = 製版) の略とすることもある。例えばケイビーエスも所属した大阪写真植字工業協同組合は、1994 年に大阪デスク・トップ・プリプレス協同組合 (大阪 DTP 協同組合) と改称している。
- 111) 高仁鳳「MAC さわりだして一年」『ナルゲ』3 号、1992 年；同「私「鳳@bong」と KBS の 40 年」。高仁鳳のノートによると、「ソウル支社」としての業務開始は 1991 年 7 月 29 日で、代表者の陳炳業との打ち合わせはそれ以前から行われていた (【C】1991 年 7 月 29 日の項)。林芳子によると、陳炳業は専任の社員というわけではなく、自身の事業の一環としてケイビーエスの代理業務を行ったようである。
- 112) 在日コリアンの本国投資については、永野慎一郎編『韓国の経済発展と在日韓国企業の役割』(岩波書店、2010 年) に多くの事例と共に紹介されている。しかし時系列的な変化を含めた全体像の復元は今後の課題である。林芳子の談話によれば、この時期、ケイビーエスのほかにも在日印刷業者で韓国への進出を試みた事例は複数あったという。
- 113) 社内報『ナルゲ』発行者欄には、第 13 号 (1995 年 7 月 10 日) までソウル支社の電話番号が記載されているが、第 14 号 (1995 年 10 月 20 日) からそれが消えている。
- 114) 林芳子の談話によれば、校正のやり取りを通じて正確な印刷物を制作することが困難だったという。注 93 所掲の資料によれば、高仁鳳は当初からオンラインでの情報の授受を考えていたようだが、1991 年の段階ではフロッピーの郵送 (DHL) に止まっていた (高仁鳳ノート【C】1991 年 10 月 2 日の項)。また大阪からソウル支社での作業の進行状況を管理することが困難で、そのため日本の顧客に対しても納期を確約できないという事情もあった (同前、11 月 12 日の項)。
- 115) 高仁鳳「MAC さわりだして一年」。
- 116) 「大阪のマルチリンガル DTP の助っ人・KBS を訪問！ (取材協力池田巧／文・編集部)」『MacJapan Bros.』1994 年 2 月号。
- 117) 高仁鳳「日・中・韓を中心としたアジア言語組版処理」。
- 118) 高咲子へのインタビュー (2022 年 8 月 10 日)。実質的な業務がないことを恐縮する高咲子に対し、高仁鳳は「これが今一番大切な仕事だから」と励ましたという。
- 119) 高仁鳳のノートによれば、1992 年 1 月には Mac 部の構想があった (【C】1992 年 1 月 10 日の項)。林芳子によれば、同じ 1 月頃に「マックがしごと」のキャッチフレーズで人を募集、雇用したという (林芳子の談話、また、いむばんじゃ「ケイビーエスつれづれ記」)。Mac 部の設置時期については、「ケイビーエス株式会社略歴 [2003 年 8 月まで]」制作時期未詳。
- 120) 「編集後記」『大写協』82 号 (平成 3 年秋号)、1991 年。この号で高仁鳳は Mac を既に利用している同業者と共に編集を担当したが、その次の号ではケイビーエスの高咲子が全面的に編集を担当した。「編集後記」『大写協』第 83 号 (平成 4 年新春号)、1992 年。以後、同会報はケイビーエスで編

集を行ったようである。

- 121) 高暎子「編集後記」『ナルゲ』創刊号, 1992年4月。「この社内報はマック All-page で作成し, アグファ 5000 で印画紙出力して, ダイレクト製版, 印刷しました」とある。高暎子によれば、『ナルゲ』は当初から Mac による印刷ノウハウを獲得する実験場としての性格を持たされていた（高暎子へのインタビュー, 前掲）。
- 122) 高仁鳳「ありがとうステーブジョブズ」。また次のような回想もある。「韓国で Mac を見たとき, ハードが日本と全く同じであった。日本の Mac であろうが韓国の Mac であろうが, Apple で作っているのどこへ行っても同じである。そこで, システムを変えればその言語を使えると思い, テストすることにした。／そのときの OS はハンゲルトーク 6.07 であった。日本でも 6 であった。それを持ってくればいいのではないかと思ったが, システムを持ってきても, プロテクトがかかっていて動かない。これは韓国の代理店が Apple を売るために, ロックがかかるようにして, これを入れないとハンゲルが立ち上がらないようにしていたためである。／それを 1 台買い, 日本語のシステム漢字トーク 6 を入れると日本語が使えた。これでハンゲルと日本語を混ぜると両方の言語が一緒にできた。同じようにして, 中国語のシステムを香港から導入したり, どんどん混ぜて多言語システムになっていった。」（高仁鳳「日・中・韓を中心としたアジア言語組版処理」）。／は原文改行。これによれば, ハンゲル Talk の入った Mac のハードウェアを韓国から購入し, 漢字 Talk を重ねてインストールするという手順を踏んだようである。
- 123) 高仁鳳ホームページ> 「1991年多言語化のため四国へ」, 2022年8月31日確認。
- 124) ㈱マキエンタープライズホームページ> 会社概要・開発履歴。2022年8月15日に確認した際, 既に閉業していたが, ホームページは閲覧できた。
- 125) 内田慶市によれば, Mac における「多言語のサポート」のため, 「元のシステムに各言語のシステムをハンドリング [バンドリングか] する」作業にマキエンタープライズ社の ScriptMover が用いられるとする（「中国語とパソコン: その古くて新しい関係」『関西大学視聴覚教育』16号, 1993年, 10ページ）。その詳細は, 開発元のマキエンタープライズ社が廃業していることもあり, 確認できていない。なお, こうした利用者の側の工夫が必要だったのは System6 までであり, System7.1 が発売されると（日本では 1992年12月）, 組み込まれた WorldScript によってデフォルトで多言語が扱えるようになった。高仁鳳も 1993年初には System7.1 を入手し, ソウル支社に送っている（高仁鳳ノート【E】1993年, 月日不詳）。その意味で高仁鳳の手法が有効性を持った期間は短かったが, この1年余の間にキーボードがタイ語を初め多くの多言語業務を獲得したことは本文で述べる通りであり, 先行者としての優位を確立する上での意義は小さくなかったと言える。なお, この項について桂卓男氏の教示を得た。
- 126) 高仁鳳は, マキエンタープライズ社が ScriptMover と同時期に開発した多言語対応のワープロソフト AllScript, DTP ソフト AllPage に関心を持ち, 1991年7月にはマキエンタープライズ社側と接触して韓国での販売代理権を獲得, これをソウル支社の業務内容に加えている。同年8月には自ら徳島のマキエンタープライズ社を訪問している。一方で ScriptMover については, コピーを人に渡さないようソウル支社に命じており, 混植システムを実現する核心技術として秘匿したいと考えていたようである。なお, 高仁鳳ホームページ「1991年 Mac 導入 多言語システムへ」には, 韓日混植の文書を作成中のモニターを撮影した 1991年12月12日の写真が掲載されている（2022年8月31日確認, 本文写真 11 参照）。高仁鳳ノート【C】1991年7月20日の項, 7月23日の項, 8月7日の項。また高仁鳳ホームページ> 「1991年多言語化のため四国へ」, 「1991年ソウル支社を設立」（2022年8月31日確認）。AllScript, AllPage の開発時期については, ㈱マキエンタープライズホームページ。
- 127) 「4月に MAC 部が誕生しました」『ナルゲ』創刊号, 1992年4月。
- 128) 「ペルシャ語の単語入力は大阪クリエイトでもらうことにして, そこへ行った。そして, ペルシャ語システム+日本語システムをつくり, エクセルに日本語を先に入力して, そのデータをもつてゆき, ペルシャ語を入力してもらう」, 高仁鳳ノート【D】, 1992年5月14日の項。

- 129) 「タイ語入力はアンピカさん」『ナルゲ』4号, 1992年8月; 「タイ語なら何でもウチらにまかしといて!」『同』6号, 1992年10月。これらではタイ人2名, 日本人1名の入力・校正スタッフが紹介されている。
- 130) 高仁鳳「しあわせをよぶカレンダー」『ナルゲ』6号, 1992年10月。
- 131) 「それぞれのフロントライン (4) ケイビーエス (大阪市)」『印刷タイムス』第1968号, 1992年。
- 132) 高仁鳳「ありがとうステープジョブズ」。同時代の資料として, 高仁鳳ノート【D】に次のような叙述がある。「きょう川村さんが来た。タイ語システムを持って。私が思った通り, このシステムでDHCのビジネスタイ語のファイルを見ると。パチシ!タイ文字がそのまま表われた。しかし, なかなか…。あれやこれやソフトをためして, やっとページメーカーでプリントすることができた」(1992年9月1日)。
- 133) 総務省統計局「統計ダッシュボード」, 2022年8月15日確認。
- 134) ただし中国語への対応は1993年までずれこんだと考えられる。ケイビーエスがMacで用いられる中国語のポストスクリプトフォントを入手したのは1993年7月前後のことであり, 「ほうぼうに手をつくしてさがしたが, やっとHongKongにあるMacの代理店から購入することができた」と述べられている(「中国語フォントが入りました」『ナルゲ』8号, 1993年7月)。第2節の導入部分で触れた高仁鳳の発言からも分かるように(注109), RECSシステムでは中国語はカバーできなかったようであり, ケイビーエスでは中国語専門の写植業者に外注していた(注68参照)。Mac用のフォントを入手したことで, ようやく中国語についても内製可能になったと考えられる。
- 135) 「それぞれのフロントライン (4) ケイビーエス (大阪市)」(前掲); 高仁鳳「ポストスクリプト大好き!」『ナルゲ』5号, 1992年9月。
- 136) 「これで, 念願の多言語処理がOK! わが社にDOS/V機も仲間入り」『ナルゲ』8号, 1993年7月。
- 137) 組版ソフトとしては主にQuarkXPressとPageMakerが用いられた。1993～2000年に在職しMac部に所属した高允哲によれば, 組版ソフトとしてはQuarkXPressが優秀だったが, 多言語の使用に制約があったので, PageMakerがもっぱら利用された。高允哲へのインタビュー(2022年2月11日, ケイビーエスにて)。なお注121で示したように, 1992年4月頃にはマキエンタープライズ社の組版ソフトAllPageも利用されていたが, 以後は利用された形跡がない。
- 138) 高仁鳳「多言語システム, いよいよ本格稼働! 3000DPIまで印画紙, フィルム出力OK!」『ナルゲ』9号, 1993年。本文で述べたように, 外部の出力機を利用すれば製版フィルムへの直接出力も可能であり(注120), 1992年にも出力センターを利用しているという記事があるが(「それぞれのフロントライン (4) ケイビーエス (大阪市)」), それが多言語同時出力に対応したものであったかは明らかでない。
- 139) 高仁鳳「多言語システム, いよいよ本格稼働」; 「どうやって外国語印刷をモノにすればいいの? (座談会)」『印刷界』1995年3月号, 1995年, 58ページ。
- 140) 「高社長ソウルへ, そして大田へ」『ナルゲ』9号, 1993年10月。また到着後はソウルから支社長と技術部長が大阪を訪れ2週間にわたって出力チェックをした。「ソウルから陳ソウル支社長, 安技術部長来阪」『ナルゲ』9号, 1993年10月。
- 141) 高仁鳳「日・中・韓を中心としたアジア言語組版処理」。続いて「RIPはハーレクイン〔Harlequin, 英〕RIPであった。これはアドビ純正ではないので, モリサワフォントは使えなかった。そこでフォントワークス社のフォントを使って日本語が使えるようになり, これで多言語のフィルム出力環境ができた。」とも述べる。イメージセッター本体はアメリカ製だったようだが, メーカーは記録されていない。高仁鳳ノート【D】1993年, 月日不詳。
- 142) 韓国の印刷業界からの情報を重視していた高仁鳳の姿勢を示す事例をもう一つ挙げておく。1997年の印刷業界紙の対談で, 高仁鳳は, 1996年2月のソウルでは出力センターにフロッピーを持ち込んで印画紙出力してもらったのが一般的だったのに, 11月になるとハードディスクを持ち込んで4色フィルムで出力するのが9割方になっていたとし, これは「一国の特殊な状況ではないと痛感した」と述べる(「new year's session インターネット社会の進展と印刷産業のポジション」『印刷ジャーナ

- ル』46号, 1997年1月)。DTP印刷で取り扱われるデータが急速に大型化している状況を、韓国の印刷業界の動向から感じ取っていたことが分かる。
- 143) 高仁鳳「94年は第3の革命を成し遂げる年」『ナルゲ』10号, 1994年1月。
- 144) MacWorld Expo/Tokyoは1994年2月18日、幕張メッセで開催された。「Expo Digest! ①「Macintoshのマルチリンガル環境～電腦外国語大学」『MacJapan Bros.』1994年4月号, 1994年。高仁鳳はPageMaker4.5Jでの中国語組版を中心に多言語組版について紹介したという。「マックワールドエキスポ東京で、講演会に高社長が講師として参加」『ナルゲ』11号, 1994年7月。
- 145) 「大阪のマルチリンガルDTPの助っ人・KBSを訪問!」; 「パソコン使い多言語印刷/ケイビーエスがシステム開発」『日本経済新聞』1994年7月20日; 「多国語印刷で国際化に一役/生野の在日韓国人二世・高仁鳳さん」『朝日新聞』大阪市内版, 1994年12月18日; 「多言語の同時印刷システムを開発した印刷業の先端企業ケイビーエス (KBS)」『経済界』1994年10・11月号, 1994年。
- 146) DTP化の進展に伴い、この時期の印刷技術は日進月歩であったから、ケイビーエスの技術がどの時点で、どのように先進的であったかは慎重な検討を要する。1995年の時点では、印刷業界誌で多言語印刷の特集が生まれ、ケイビーエスを含むいくつかの企業が、それぞれの方法でこれに取り組んでいたことが分かる。「どうやって外国語印刷をモノにすればいいの? (座談会)」。
- 147) 高仁鳳ノート【F】1993年9月か。そこでは広報について、「出力キのことに 대해서는 ベールでかくす。出力キの製品名をあきらかにしない。KBSのブランド名をつける。いろいろととのって、KBSで販売可能であったら、ベールをとる」とあり、技術の独自性を強く意識していたことが分かる。実際に1994年の雑誌取材では、高仁鳳が「イメージセッターは企業秘密だから写さないでね」とかくまってしまうと報じられている。「大阪のマルチリンガルDTPの助っ人・KBSを訪問!」。
- 148) この頃Mac部に所属した高允哲によれば、初代のイメージセッターは動作が遅く、写真はA4サイズでも半日以上かかることがあった。カラー印刷用の4色分版フィルムで出力するときには一晩かけて出力することがあったが、気温の日較差のため、はじめに印刷したものと後で印刷したものの間でズレが生じ、使い物にならないといったことも経験した。高允哲へのインタビュー (前掲)。
- 149) 新しい出力機では出力可能なサイズが大きくなり、モリサワ日本語書体が利用できるようになった。「イメージセッター増設! B3 トンボ付きが出力可能に」『ナルゲ』14号, 1995年10月。
- 150) 高仁鳳「B2 ワイド高品質のイメージセッター導入」『ナルゲ』19号, 1997年6月。富士通製LuxSetter5600にKBSの多言語RIPを搭載したという。
- 151) 1999年頃の状況を高允哲は次のように述べている。「我がKBSの主力は[MacOS]「8.0」もしくは「7.5.5」である。[中略]我々はいつも多言語のシステムを使う。日本語、韓国語、北京語、台湾語の入っているシステムが基本である。場合によってはそこにロシア語やタイ語が加わる。フォントの数の多さも出力センター顔負けである。[中略]主力ソフト「ページメーカー」「クオークエクスプレス」「イラストレーター」「フォトショップ」がどんどんアップグレードしている。私が使っているのが最新の物はひとつもない。[中略]しかし、他社との互換性という意味で、バージョンアップを余儀なくされるのである。それはしかたない。そして当然ハード、OSともアップグレードしなければならない。そろそろその時期が近づいている」(高允哲「近頃のKBSマック事情」『ナルゲ』22号, 1999年1月)。
- 152) 高仁鳳「Windows多言語印刷もOK!」『ナルゲ』21号, 1998年9月。これによれば、この段階で既に4台のWindows機があり業務に利用されていたという。
- 153) 「当社において、マックによる組版がほとんどですが、新年からはWindowsによる組版をもっと進めます。現在、カラオケなど一部は電算写植を使っていますが、写真や画像も入らず、文字のみ。しかも印画紙しか出力できない。もうそろそろ、このシステムは去る運命にあるようです」(高仁鳳「卯年。兎年。うさぎのように飛躍しよう」『ナルゲ』22号, 1999年1月)。文中では電算写植とするが、印画紙での出力ができたことから、モリサワの電算写植システムではなく、リョービの電子組版システムのことであろう。実際に利用終了したのは2001年頃と見られる (後注161)。

- 154) 注 151, 高允哲「近頃の KBS マック事情」(前掲)の引用文を参照。林芳子の談話によれば, 1990 年代のケイビーエスは決して余裕のある財務状態ではなかった。頻繁な設備更新は財務的には大きな負担となったであろう。
- 155) 前稿注 122, 本稿注 42 参照。
- 156) 在日韓国・朝鮮人問題学習センターは 1984 年に郵便外務職の国籍条項撤廃運動の一環として設立され, 2013 年に在日コリアン・マイノリティー人権研究センターに改組された。同センターのホームページ>沿革 (2022 年 8 月 17 日閲覧)。
- 157) コリアファミリーサークル (大阪市南区) は 1986 年 9 月に『コリア就職情報』を創刊し, その第 3 号 (1987 年 8 月) から僑文社が印刷を担当した。ケイビーエスには 1994 年発行の第 22 号まで所蔵されている。この団体の詳細は不明だが, 1987 年の新聞記事によれば, 在日 2 世の康誠凱が「在日の若者たちが「ちゃんとした大学を出ても, 日本の企業に受け入れてもらえない」と悩むのを見て約 1700 万円を借り, 赤字覚悟で始めた雑誌」であり, その趣旨は「われわれは日本社会で生きていかねばならない。民族差別批判も原則的には大事なことだが, 日本の企業社会にどう定着していくかを現実の課題にしよう」というものであった。「唯日史観 無意識に他民族排除 (不惑の憲法: 4)」『朝日新聞』1987 年 5 月 5 日朝刊, 朝日新聞クロスサーチ (2022 年 8 月 17 日確認)。また「在日韓国・朝鮮籍の若者に就職誌: コリア就職情報センター代表康誠凱さん (胸の内)」『日本経済新聞』大阪版夕刊, 1986 年 7 月 30 日にも関係記事がある。
- 158) 1990 年の立ち上げ当初の実行委員長は瀧藤尊教 (四天王寺管長) と李熙健 (大阪興銀理事長) であった (「四天王寺で古代行列復元 (青鉛筆)」『朝日新聞』1990 年 7 月 7 日朝刊大阪版, 朝日新聞クロスサーチ, 2022 年 8 月 17 日確認)。大阪興銀の後身である関西興銀の破綻により 2001 年から中断されたが, 2004 年から NPO 法人大阪ワッソ文化交流協会が再開した。
- 159) 林芳子の談話によれば, 僑文社の時期から, 在日大韓基督教会・韓国民団・白頭学院からの受注は途切れることなく続いてきた。ただし民団や教会の内部的な文書は, ワープロの普及により各団体内で内製されるようになり, 受注は減少したという。
- 160) 『バーン・ラオ』の発行団体ワラボラでは, 準備段階で印刷を最大のネックとしていたが, 事務局員の個人的な伝手からケイビーエスで対応可能であると分かり, 刊行が実現した。田村太郎『『ニューメディア』としての多言語情報誌『ナルゲ』12 号, 1995 年。ケイビーエスには創刊号 (1994 年) から第 4 号 (1995 年) まで所蔵されている。
- 161) カラオケの目次本は 2001 年頃に電算写植から Mac による DTP に移行したが, その後も「最大の難関はルビ」であり, 「タイトル全体にかかるグルーブルビではなく, 1 文字づつにかかるモノルビであるため, 組版に流し込むためのデータをどのように作るかが問題」とされ, これを解決するための自動化プログラムが社内開発された。「多言語カラオケ組版 自動化プログラムで対応」『ナルゲ』29 号, 2003 年 1 月。
- 162) 飯田剛史『在日コリアンの宗教と祭り: 民族と宗教の社会学』世界思想社, 2002 年, 51 ~ 52 ページ。
- 163) 発行元は株式会社 The Third Eye Corporation (東京)。「4 国語 LIVE 情報誌「We're」」『ナルゲ』4 号, 1992 年 8 月。ケイビーエスには通巻第 2 号 (1992 年) から第 19 号 (1993 年) まで所蔵されている (欠号あり)。
- 164) 前稿では新日本工機の説明書類 (1968 年), ユニチカのあいさつ文 (1969 年) について紹介した。前稿 69 ページ, 71 ページ。
- 165) 代表的な例として家電製品のマニュアルなどが挙げられる。「どうやって外国語印刷をモノにすればいいの? (座談会)」。
- 166) オフセット印刷機は 1987 年頃, 自動活版印刷機 (プラテン機) は 1990 年頃に放出された。いむばんじゃ「ケイビーエスつれづれ記」。
- 167) 「ハンゲル電算写植/多言語同時電算出力/世界初で新境地拓く (在日同胞 ENOMY & BUSINESS)」『統一日報』5233 号, 1993 年 2 月 5 日。
- 168) 「多言語データの出来るまで」『ナルゲ』22 号, 1999 年 1 月; 「編集後記」『ナルゲ』30 号, 2003 年

- 8月。データ形式について、前者では「アウトラインデータ」、後者では「PDF」と表現されている。
- 169) 「多言語データの出来るまで」。
- 170) 「多言語対応サービスを展開：KBS」『日本印刷新聞』4380号，1999年。「KBS／多言語アウトラインデータ制作サービス好評」『印刷ジャーナル』143号，1999年12月にも同趣旨の記事がある。
- 171) 益田治「KBSはソフトハウス!？」『ナルゲ』26号，2001年8月；高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」。また2001年にはユニバーサル・スタジオ・ジャパンの開業にあわせて、ホームページの韓国語・中国語翻訳とHTML化を担当した。「KBS作品集1968年～2017年」『ナルゲ』51号，2018年1月。
- 172) 益田治「KBSはソフトハウス?」；李秀泰「マニュアルも多言語PDF化，ネットで納品」『ナルゲ』26号，2001年8月；李秀泰「多言語PDF化に日々苦闘」『ナルゲ』51号，2018年1月；「ケイビーエス：アプリケーション多言語化で独自の路線見出す」『プリントレンド』375号，2001年4月。これらによれば，ケイビーエスはBHA社のCD-R/Wソフトのローカライズを行った。日本製のソフトを他のアジア言語にローカライズするという試みは，当時他に行っていた企業がなく，多くの困難があった。ケイビーエスでは韓国・中国で協力者を探して一部外注を試みたもののうまくいかず，結局は社内で取り組むことになったという。
- 173) 原文韓国語，石川の翻訳による。高仁鳳ノート【G】，日付なし。前後の記述から，高仁鳳は1994年8月9日，「94世界ウリ民族青年大会」の一環として新大阪センシティホテルで講演を行った。引用文はその草稿としてノートに書き留められたものようである。催しの詳細は明らかでない。
- 174) 「どうやって外国語印刷をモノにすればいいの?」58頁，60頁。
- 175) 「KBS社長高仁鳳さん：多言語同時印刷可能に（シリーズ在日商工人不況に挑む3）」『東洋経済日報』1998年6月5日。
- 176) 「ハンゲル電算写植・多言語同時出力／世界初で新境地拓く」。
- 177) 高仁鳳ノート【F】，日付なし。引用文中に「昨年」イメージセッターを導入したとあり，1994年の記事であることが推測できる。
- 178) このことは，表2に見える制作物の中にも，発行者からの直受けではなく，同業他社からの下請けが含まれていたことを意味する。その比率は確認できないが，林芳子の談話によれば，決して低い割合ではなかった。
- 179) 「new year's session インターネット社会の進展と印刷産業のポジション」。
- 180) 高仁鳳ノート【I】1996年，日付なし。
- 181) 高仁鳳ノート【H】1995年，日付なし。
- 182) ケイビーエス株式会社『1995年度経営計画』1995年1月。
- 183) 以下，表4に基づく説明のうち，表に記載されていない情報は林芳子の談話と，高允哲へのインタビュー（前掲）による。
- 184) 1994年の雑誌記事では「KBS社内における“内なる国際化”は既に達成しているといえそうだ。というのも，学生アルバイトも含めて，KBSには日本人，韓国人，中国人，台湾人，ベトナム人，タイ人と多様な民族の社員が机を並べて働いており」とある。「多言語の同時印刷システムを開発した印刷業の先端企業ケイビーエス（KBS）」。
- 185) 原文ハンゲル，石川の翻訳による。高仁鳳ノート【G】，日付なし。1994年7月20日の『日本経済新聞』記事（注145）に言及しており，その直後のものと思われる。
- 186) 「多言語の同時印刷システムを開発した印刷業の先端企業ケイビーエス（KBS）」。外国人留学生寮について語っているもう一つの記事は「多国語印刷で国際化に一役／生野の在日韓国人二世・高仁鳳さん」。
- 187) 「どうやって外国語印刷をモノにすればいいの?」；「無限大の可能性 インターネット（経営スコープ：ケイビーエス）」『日本印刷新聞』1998年4月22日。またニフティサーブによる情報交換について高仁鳳「ありがとうスティーブジョブズ」。
- 188) 「インターネットサーフィン」『ナルゲ』15号，1996年1月。

- 189) 高仁鳳「インターネット発信中！」『ナルゲ』16号, 1996年6月; 高仁鳳「ありがとうステイブジョブズ」。ホームページの利用について, 「ホームページで日→韓機械翻訳開始」『ナルゲ』18号, 1997年1月。ケイビーエスのホームページ開設は大阪の写植・組版業界の中でも早かった。松井博司(近畿グラフィックコミュニケーションズ工業組合理事長)「創業40周年に当たって」『ナルゲ』39号, 2008年1月。
- 190) 「Eメールで多言語を翻訳・出版:ケイビーエス」『印刷界』1997年10月号。
- 191) 高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」。金孝晃は在日コリアン二世で, 1995年から2008年まで済民日報社社長を務めた。헤드라인제주 [ヘッドライン済州] > 「김효황 전 회장, 제민일보 명예 회장으로 추대 [金孝晃前会長, 済民日報名誉会長に推戴]」2012年10月23日付, 2022年8月31日確認。
- 192) 「インターネットを新聞制作に活用」『MONZ』第328号, 1997年5月1日。
- 193) 同前。
- 194) 同前, また「済民日報(日本語版)ができるまで」『ナルゲ』19号, 1997年6月。
- 195) 「インターネットを新聞制作に活用」; 「Eメールで多言語を翻訳・出版:ケイビーエス」。
- 196) 制作を終えた正確な時期は不明だが, 『ナルゲ』22号(1999年1月)に「以前一緒に仕事をした済民日報社」を1998年11月に訪問したとあり(2ページ), この頃までには制作を終えていたことが推測される。
- 197) 株式会社ミスミ, 表2参照。高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」。

<参考文献>

※原則として著者名・タイトル五十音順。韓国語文献は各項の末尾に付した。

(公刊資料等)

- 飯田剛史『在日コリアンの宗教と祭り:民族と宗教の社会学』世界思想社, 2002年。
- 「Eメールで多言語を翻訳・出版:ケイビーエス」『印刷界』1997年10月号。
- 「いま,印刷革命:ハングル写植のコンピュータ化に成功」『統一日報』2739号, 1982年8月17日。
- 「インターネットを新聞制作に活用」『MONZ』328号, 1997年5月1日。
- 内田慶市「中国語とパソコン:その古くて新しい関係」『関西大学視聴覚教育』16号, 1993年
- 「Expo Digest! ①「Macintoshのマルチリンガル環境~電腦外国語大学」」『MacJapan Bros.』1994年4月号, 1994年。
- 「大阪・僑文社/日文・ハングルの混植がパソコン上で可能に」『MONZ』204号, 1987年9月。
- 「大阪・先進グラフィックアーツ展:座談会「組版」『なにわ』(大阪府軽印刷業協同組合・日軽印大阪府支部)53号, 1987年11月。
- 「大阪のマルチリンガルDTPの助っ人・KBSを訪問!(取材協力池田巧/文・編集部)」『MacJapan Bros.』1994年2月号。
- 「海外へ初のモリサワライノトロン202」『モリサワのひろば』11号, 1983年2月。
- 片貝孝夫・平川敬子『パソコン驚異の10年史(ブルーボックスB721)』講談社, 1988年。
- (株)高電社「KOA-文書[한글]」製品リーフレット, 作成年不明。
- (株)ミチヤ組版システム部「組版統合システム秀嶺シリーズの基本思想と概要」『印刷界』1986年3月号。
- 菅野裕臣「本誌の編集方針とその内容」『基礎ハングル』1巻1号, 1985年。
- 「企業ルポ・僑文社:日本と韓国のかげ橋/ハングル文字印刷ひと筋」『日本印刷新聞』3298号, 1987年10月31日。
- 「企業ルポ/한글なら, おまかせ/僑文社(大阪府支部)」『軽印刷』409号, 1988年12月
- 「KBS/多言語アウトラインデータ制作サービス好評」『印刷ジャーナル』143号, 1999年12月。

- 「ケイビーエス：アプリケーション多言語化で独自の路線見出す」『プリントレンド』375号，2001年4月。
- 「KBS社長高仁鳳さん：多言語同時印刷可能に（シリーズ在日商工人不況に挑む3）」『東洋経済日報』1998年6月5日。
- 高仁鳳コウインボン「日・中・韓を中心としたアジア言語組版処理」『Text & Graphics』9巻4号（通巻196号），テキスト&グラフィックス研究会（日本印刷技術協会），2002年11月。
- 「高京徹（奥田喜久男の千日回峰）」『Weekly BCN』1780号，2019年。
- 「在日韓国・朝鮮籍の若者に就職誌：コリア就職情報センター代表康誠凱さん（胸の内）」『日本経済新聞』大阪版夕刊，1986年7月30日。
- 「四天王寺で古代行列復元（青鉛筆）」『朝日新聞』1990年7月7日，朝刊大阪版，朝日新聞クロスサーチ（2022年8月17日確認）。
- 辛基秀シンギョウ「ハンゲル印刷の高仁鳳さん（在日朝鮮人36）」『季刊三千里』46号，1986年。
- 「ズラリ2万9千点の本」『読売新聞』1984年5月19日朝刊（読売新聞ヨミダス）。
- 「世界初のハンゲル電算写植機 生野・僑文社で稼働」『統一日報』2776号，1982年10月13日。
- 「世界初ハンゲルワープロ：大阪・僑文社」『統一日報』2739号，1982年8月17日。
- 「それぞれのフロントライン（4）ケイビーエス（大阪市）」『印刷タイムス』第1968号，1992年。
- 「多国語印刷で国際化に一役／生野の在日韓国人二世・高仁鳳さん」『朝日新聞』大阪市内版，1994年12月18日。
- 「多言語対応サービスを展開：KBS」『日本印刷新聞』4380号，1999年。
- 「多言語の同時印刷システムを開発した印刷業の先端企業ケイビーエス（KBS）」『経済界』1994年10・11月号，1994年
- 塚本勲『朝鮮語を考える』白帝社，2001年。
- 「どうやって外国語印刷をモノにすればいいの？（座談会）」『印刷界』1995年3月号，1995年。
- 中西秀彦『学術出版の技術変遷論考：活版からDTPまで』印刷学会出版部，2011年。
- 永野慎一郎（編）『韓国の経済発展と在日韓国企業の役割』岩波書店，2010年。
- 南相瓊ナムサウジュン「NHK「ハンゲル講座」の成立過程にかんする研究ノート：日本人の韓国・朝鮮語学習にかんする歴史的研究（その2）」『金沢大学教養部論集』人文科学篇32巻1号，1994年。
- 「日本唯一の先進システム誇る／ハンゲル電植機が威力／韓国語熟知のスペシャリスト：僑文社」『印刷百科』42号，1986年3月。
- 「new year's session インターネット社会の進展と印刷産業のポジション」『印刷ジャーナル』46号，1997年1月。
- 白頭学院創立60周年記念誌委員会（編）『建国：白頭学院創立60周年記念誌』学校法人白頭学院，2006年。
- 「パソコン使い多言語印刷／ケイビーエスがシステム開発」『日本経済新聞』1994年7月20日。
- 「ハンゲルで電算写植を：僑文社」『写植タイムス』155号，1983年12月。
- 「ハンゲル電算写植・多言語同時電算出力：世界初で新境地拓く」『統一日報』5233号，1993年2月5日。
- 「ハンゲル20年同胞印刷所」『統一日報』4212号，1988年10月8日。
- 「ハンゲル文字組版の領域拡大にかける（株）僑文社」『MONZ』222号，1989年1月。
- 「人：KBS株式会社社長高仁鳳さん」『東和新聞』2640号，1990年3月22日。
- 福田栄一・草柳隆三（編）『写植に生き，文字に生き：森澤親子二代の挑戦』ベンチャーコミュニケーションズ協会ビッグライフヒストリー編纂局，1999年。
- 布施茂（責任編集）『技術者たちの挑戦：写真植字機技術史』創英社／三省堂書店，2016年。
- 「フル稼働の同胞ハンゲル印刷所／文化発展への気概こめ」『統一日報』2843号，1983年1月21日。
- 「編者のことば」『朝鮮語大辞典』上巻，角川書店，1986年。
- 「編集後記」『大写協』（大阪写真植字工業協同組合）82号（平成3年秋号），1991年。
- 「編集後記」『大写協』83号（平成4年新春号），1992年。
- 「無限大の可能性 インターネット（経営スコープ：ケイビーエス）」『日本印刷新聞』1998年4月22日。

「唯日史観 無意識に他民族排除 (不惑の憲法: 4)』『朝日新聞』1987年5月5日朝刊, 朝日新聞クロスサーチ (2022年8月17日確認)。

リョービ㈱「RECS200」製品パンフレット, 作成日不明。

「한글 写植機도 컴퓨터화 [ハングル写植機もコンピュータ化]: 大阪 生野区 僑文社』『한국일보』日本版, 1982年9月5日)

(ケイビーエス社内資料, 社内報, 高仁鳳個人資料)

石川亮太「鄭炳采チョンビョンサエさんに聞くケイビーエスの歩み: ハングル印刷から多言語印刷・翻訳へ」『ナルゲ』

55号, 2022年1月

李秀泰「多言語 PDF 化に日々苦闘」『ナルゲ』51号, 2018年1月。

李秀泰「マニュアルも多言語 PDF 化, ネットで納品, 『ナルゲ』26号, 2001年8月

いむばんじゃ「ケイビーエスつれづれ記」『ナルゲ』20号, 1998年1月。

「イメージセッター増設! B3 トンボ付きが出力可能に」『ナルゲ』14号, 1995年10月。

「インターネットサーフィン」『ナルゲ』15号, 1996年1月。

上間行洋「組版の変遷」『ナルゲ』51号, 2018年1月。

上間行洋「写植の思い出」『ナルゲ』35号, 2006年1月。

ケイビーエス株式会社『1995年度経営計画』1995年1月。

「ケイビーエス株式会社の略歴 (1990年1月現在)」作成時期不詳。

「ケイビーエス株式会社の略歴 (1994年4月現在)」作成時期不詳。

「ケイビーエス株式会社略歴 [2003年8月まで]」作成時期不詳。

「KBS 作品集 1968年~2017年」『ナルゲ』51号, 2018年1月。

高仁鳳コウニンボン「ああ, 創業30年! これからも一歩先を進む」『ナルゲ』20号, 1998年。

高仁鳳「ありがとうステイブジョブズ」『ナルゲ』45号, 2012年1月。

高仁鳳「インターネット発信中!」『ナルゲ』16号, 1996年6月。

高仁鳳「Windows 多言語印刷も OK!」『ナルゲ』21号, 1998年9月。

高仁鳳「卯年。兎年。うさぎのように飛躍しよう」『ナルゲ』22号, 1999年1月

高仁鳳から佐野正利 (角川書店) へ, ファクス原稿, 1982年10月14日。

高仁鳳「94年は第3の革命を成し遂げる年」『ナルゲ』10号, 1994年1月。

高仁鳳「在日韓国人企業名鑑の印刷経緯」作成時期不詳 (1989年頃か)。

高仁鳳, 書簡下書き, 1983年3月19日付。

高仁鳳「しあわせをよぶカレンダー」『ナルゲ』6号, 1992年10月。

高仁鳳『ソウルと大阪の狭間で』2012年, 私家版。

高仁鳳「多言語システム, いよいよ本格稼働! 3000DPI まで印画紙, フィルム出力 OK!」『ナルゲ』9号, 1993年

高仁鳳「B2 ワイド高品質のイメージセッター導入」『ナルゲ』19号, 1997年6月。

高仁鳳「ポストスクリプト大好き!」『ナルゲ』5号, 1992年9月。

高仁鳳「MAC さわりだして一年」『ナルゲ』3号, 1992年7月。

高仁鳳「私「鳳@bong」とKBSの40年」『ナルゲ』39号, 2008年1月。

高仁鳳ノート【A】, 表題なし, 「CENSOR」青色ビニール表紙, 1982年。

高仁鳳ノート【B】, 表題なし, 「NPO DIARY '84」赤色ビニール表紙, 1984年。

高仁鳳ノート【C】, 表題なし, 「Business Diary/エンゼルビック株式会社」黒色ビニール表紙, 1991年。

高仁鳳ノート【D】, 『1992春MAC部①』, 「Campus」赤色紙表紙, 1992年。

高仁鳳ノート【E】, 表題なし, 「SEINO '93」青色ビニール表紙, 1993年。

高仁鳳ノート【F】, 表題なし, 「EXCEL」茶色ビニール表紙, 1993~94年。

高仁鳳ノート【G】, 『'946月20日→8/25』, 「Campus」青色紙表紙, 1994年。

高仁鳳ノート【H】, 表題なし, 「EXCEL/エンゼルビック株式会社」茶色ビニール表紙, 1995年。

高仁鳳ノート【1】、『96.9.20→'97.2.21』,「Campus」橙色紙表紙,1996～97年。
 「高社長ソウルへ,そして大田へ」『ナルゲ』9号,1993年10月
 高允哲^{コウインチョル}「近頃のKBSマック事情」『ナルゲ』22号,1999年1月
 高暎子^{コウインジャ}「編集後記」『ナルゲ』創刊号,1992年4月。
 「これで,念願の多言語処理がOK!わが社にDOS/V機も仲間入り」『ナルゲ』8号,1993年7月。
 「済民日報(日本語版)ができるまで」『ナルゲ』19号,1997年6月。
 佐野正利「「ハミョンテング」と「共生」の精神で前進を」『ナルゲ』20号,1998年1月。
 「4月にMAC部が誕生しました」『ナルゲ』創刊号,1992年4月。
 「新入社員です,よろしくお願ひします。(営業企画部)」『ナルゲ』23号,1999年9月。
 「ソウルから陳ソウル支社長,安技術部長来阪」『ナルゲ』9号,1993年10月。
 「タイ語なら何でもウチらにまかしといて!」『ナルゲ』6号,1992年10月。
 「タイ語入力はアンピカさん」『ナルゲ』4号,1992年8月。
 「多言語データの出来るまで」『ナルゲ』22号,1999年1月。
 「多言語カラオケ組版自動化プログラムで対応」『ナルゲ』29号,2003年1月。
 田村太郎「『ニューメディア』としての多言語情報誌」『ナルゲ』12号,1995年。
 済民日報^{サエミンニルポ}(日本語版)ができるまで『ナルゲ』19号,1997年6月。
 「中国語フォントが入りました」『ナルゲ』8号,1993年7月
 鄭炳熏^{チョンビョンフン}「僕を活かしてくれました:僑文社のこと」『ナルゲ』51号,2018年1月
 藤田真一「さらなる技術の発展に期待」『ナルゲ』20号,1998年1月。
 「編集後記」『ナルゲ』30号,2003年8月。
 「ホームページで日→韓機械翻訳開始」『ナルゲ』18号,1997年1月。
 益田治「KBSはソフトハウス!」『ナルゲ』26号,2001年8月。
 松井博司「創業40周年に当たって」『ナルゲ』39号,2008年1月。
 「マックワールドエキスポ東京で,講演会に高社長が講師として参加」『ナルゲ』11号,1994年7月。
 「4カ国語LIVE情報誌「We're」」『ナルゲ』4号,1992年8月。

(ウェブサイト)

(一般社団法人) 在日コリアン・マイノリティ人権研究センターホームページ>沿革,2022年8月17日確認。
 ㈱高電社ホームページ>沿革,2022年8月2日確認
 ㈱三修社ホームページ>会社案内(2022年8月5日確認)
 ㈱マキエンタープライズホームページ>会社概要・開発履歴,2022年8月15日確認。
 高仁鳳ホームページ(鳳@bongのpage)>「1991年多言語化のため四国へ」,2022年8月31日確認。
 高仁鳳ホームページ>「1991年Mac導入多言語システムへ」,2022年8月31日確認。
 高仁鳳ホームページ>「1991年ソウル支社を設立」,2022年8月31日確認。
 高仁鳳ホームページ>「僑文社在日実業名鑑を編集」,2022年8月31日確認。
 公益社団法人日本印刷技術協会ホームページ>「ワープロから電子組版へ(1):印刷100年の変革」(澤田善彦著作集),2001年9月15日付,2022年8月1日確認。
 公益社団法人日本印刷技術協会ホームページ>「ワープロから電子組版へ(2):印刷100年の変革」(澤田善彦著作集),2001年9月30日付,2022年8月12日確認。
 総務省統計局>統計ダッシュボード,2022年8月15日確認。
 リョービMHグラフィックテクノロジー㈱ホームページ>会社案内>沿革,2022年8月2日確認。
 헤트라인제주>「김효찬 전 회장, 제민일보 명예회장으로 추대」,2012年10月23日付,2022年8月31日確認。

(インタビュー等)

コウエンチヨル

高允哲へのインタビュー (2022年2月11日, ケイビーエスにて)

コウヨシヅメ

高瑛子へのインタビュー (2022年8月10日, 電話)。

斎藤俊樹の筆者あてメール (2022年2月25日, 3月1日)。

チオンビヨウチエ

鄭炳采へのインタビュー (2021年8月29日, ケイビーエスにて)。

チオンビヨウファン

鄭炳熏へのインタビュー (2022年2月25日, ケイビーエスにて)。

塚本勲へのインタビュー (2021年11月6日, 電話)。

萩野隆三へのインタビュー (2022年7月1日, 友好社 (大阪市) にて)

三木武・村辻博見へのインタビュー (2022年8月8日, ケイビーエスにて)

三木武の筆者あてメール (2022年7月28日, 8月1日)。

向井謙之へのインタビュー (2022年5月25日, エス・ブイ・エフ (大阪市) にて)。

村辻博見の筆者あてメール (2022年9月2日)。